

みちみちの散歩路



南種子町

目次	1
	『発刊のことば』 南種子町長 柳田 長谷男	5
	『現代の「龍宮づくり」』南種子町教育委員会教育長 川田 孝雄	6
第一章	南種子町へのいざない.....	7
	・概要 (位置、地勢、気候、人口、町民憲章、町章、町花、町木)	
	・四季折々の表情・南種子八景・町指定文化財一覧	
第二章	心のふるさとをたずねて.....	18
	1 台地に広がる長谷地区.....	19
	2 米作りのさかんな平山地区.....	20
	3 水田の広がる基永地区.....	21
	4 南種子町の中心地にある上中地区.....	23
	5 太平洋に面した下中地区.....	24
	6 南の台地に広がる西之地区.....	26
	7 西海岸にある西海地区.....	27
	8 南種子町の玄関島間地区.....	28
第三章	南種子の歴史.....	31
	(1) 縄文時代の南種子.....	31
	(2) 弥生時代の南種子.....	32
	(3) 上妻城.....	34
	(4) 火合峰 <small>ひあみね</small>	35
	(5) 鉄砲伝来紀功碑.....	35
	(6) 牧(マキ)の神.....	37
	(7) 貫門 <small>ぬきもん</small>	38
	(8) 種子島製塩発祥の地.....	39
	(9) 製糖発祥の地.....	40
	(10) 大塚様の石塔 <small>おおつかさま</small>	41
	(11) 南種子への入植.....	41
	(12) 宇宙センター.....	43
	(13) これからの宇宙開発.....	44
第四章	南種子町の宝物.....	46
	(1) 野口 <small>のぐち</small>	46
	(2) インギー鶏 <small>どり</small>	47

	(3) 枕状溶岩	48
	(4) 田代化石	48
	(5) 埋蔵文化財	48
第五章	南種子の人物伝	51
	(1) 日悦上人 <small>にらえつしやうにん</small>	51
	(2) 松寿院(種子島隣子) <small>しやうじゆいん ちかこ</small>	52
	(3) 菊池竹庵 <small>きくちちくあん</small>	53
	(4) 砂坂孫左衛門 <small>すなさかまござえもん</small>	54
	(5) 牛野豊女 <small>うしのとよじよ</small>	55
	(6) 日高亮助	56
	(7) 蛟島二男丸 <small>あめしまに おまる</small>	57
第六章	南種子の民俗芸能	58
	(1) 福祭文 <small>くさいもん</small>	58
	(2) 蚕舞(祝福芸) <small>かごまゐ</small>	59
	(3) 座敷舞(狂言) <small>ざしきまゐ</small>	60
	(4) 西目出し(祝福芸) <small>にしめだ</small>	62
	(5) 宝満神社「赤米」お田植祭り	62
	(6) 下中入幡神社お田植祭り	65
	(7) 西之本国寺盆踊り(風流) <small>ふりゆう</small>	67
	(8) 9月踊り(願成就) <small>がんじやうじゆ</small>	68
	(9) 南種子の民謡	70
	① 草切り節	70
	② なあなあ節	71
	③ こうらい節	71
	④ 樟脳節	71
	⑤ ようかい	71
	⑥ こっちこい	71
	⑦ めでた節	71
	(10) 新しい祭り(ロケット祭り・ふるさと祭り)	72
	① ロケット祭り	72
	② ふるさと祭り	73
第七章	南種子町の産業	76

	(1) 農 業	77
	(2) 畜 産	81
	(3) 林 業	82
	(4) 水産業	83
	(5) 商 業	85
	(6) 工 業	86
	(7) 交 通	88
	(8) 観 光	91
	(9) 南種子町の特産品と味	94
第八章	南種子町の宇宙にかける子どもの夢	95
	編集後記 編集委員長 河野 了	97
	参考文献	99

発刊のことば

南種子町長 柳田長谷男



すべての人々に、それぞれのふるさどがあり、断ちきることのできない、ふるさどのかかわりをもちながら人々は生きています。

私たちのふるさと南種子町は、青くきれいな海と豊かな緑に包まれた自然と人情の美しい町です。そしてまた広い農地があり、海の幸、山の幸にも恵まれた暮らしやすい町です。民俗芸能の豊庫ともいわれている文化の町でもあります。私たちはこの町を自分のふるさどとして大切に思っています。

先に私は「ふるさとを愛し誇りとする運動」を提唱し、関係者のご努力により各種の事業活動を展開しておりますが、その一環として、このふるさと史「みなみたねの散歩路」を発刊することになりました。

このふるさと史は、南種子町の歴史と現状をわかりやすく記述し、小中学生から高齢者に至る各年代層において、生涯学習などで広く活用することを趣旨としております。特に青少年の皆さんが自分の郷土のことをよく知り、このすばらしい南種子町を誇りとしながら、逞^{たくま}ましく成長していられるよう希望します。

かけがえのないわがふるさとを、お互いの方で、さらによりよく発展させてゆくために、ふるさと史が広く活用され、大きな役割を果たすことを心から期待するものです。

現代の「龍宮づくり」

南種子町教育委員会 教育長 川 田 孝 雄



「龍宮は、南種子ではなかったか。」と言う人を、わたしは知っています。澄みきった青い空、紺碧の海、その海に浮かぶ島々、温暖な気候、豊かな海の幸、そのなかで確かに祖先が力を合わせて生きてきた証である伝承芸能や遺跡など、南種子は「龍宮」と呼ぶにふさわしいところだと思います。

南種子の現在に生きるわたしたちは、この「みなみたねのよき」をよく理解し、そして、将来にわたって語り伝えていかなければならない。そういう願いでこの「ふるさとの散歩路」は編纂いたしました。文章も、だれもが読みやすいように、平易な表現にと努力してあります。

さて、わたしは、人間として生きていくなかで大切なことは、自分の存在を正しく主張できることだと思います。「わたしは南種子町に住んでいます。」「南種子町はすばらしいところです。」「わたしは、ここで生活していきます。」と胸を張って主張する、その強い気持ち、人間として生きていくうえで大切なことだと思うのです。

南種子町も同じです。そこに住んでいる人々が、自分を正しく主張できる、ここで自信を持って生きているという事実があるとき、南種子町の存在が、世の人々に大きく認められると考えるからです。

南種子町には、日本唯一の実用ロケット基地があります。澄みきった空と紺碧の海があります。また、日本初の鉄砲伝来の地門倉岬など史跡、遺跡も多くあります。しかしながら、これらのものは、ただ「ある」だけでは新しい価値は生まれません。町民ひとりひとりが、この町の名勝、自然、遺跡等を十分理解し、そして、他人に正しく説明できる、そのとき初めて、これらの名所、旧跡等に生命が宿るのです。

H-IIロケットの打ち上げ成功には、日本中が、きっと沸き上がります。この澄みきった空や紺碧の海は南種子だけでなく日本の宝です。命がけて外国の難破船を救った偉大な行為と広い心は、現在の南種子町民の心に生き続けています。

この「みなみたねの散歩路」を多くの町民が読み、南種子町のよきを再認識し、新しい南種子町の魅力を創ろうという行動が生まれたとき、現代の「龍宮」が出現するはず。多くの人が住みたい、学びたい、遊びたい魅力がある「みなみたね龍宮」を町民ひとりひとりが創るのだという意識が大きく育つことを願っています。

第1章 南種子町へのいざない

—— 青い空・澄んだ海・さわやかな風・スペースポート南種子 ——



「オジャイ申せ」(いらっしやい)

あお
蒼い空に澄んだ海、さわやかな風と万緑の自然、人情豊かなところ。輝かしい鉄砲伝来の歴史を持つ「火繩の里」から、科学技術の最先端に行く日本唯一の実用衛星打ち上げ基地のある「ロケットの町」として知られているところ。ここが私たちの町、躍動する明るい南種子町です。

南種子町は、地図を見てわかるように、種子島の一番南の端にあります。総面積は110.37km²です。東と西と南の三方を海に囲まれ、海岸線の長さは43kmあります。

鹿児島市からは、海をへだてて152kmありますが、交通は、空の便も海の便もともに便利で、鹿児島市から、最も近い島になっています。

空の便は、鹿児島空港を1日5便離着陸する日本エアコミューターのYS11機に搭乗すると、大隅半島や絵のような南海の景色を眼下に約40分で、蘇鉄の葉が茂る南国色豊かな空の玄関口種子島空港に着陸します。

海の便は、カーフェリーが二隻就航しています。鹿児島港を、毎朝出港するフェリー出島(九州商船)か、隔日に鹿児島港を午後出港するフェリー第二屋久島丸(鹿児島商船)に乗船すると、桜島の噴煙を後に錦江湾から外洋へ約4時間で、緑に包まれた平坦な台地の続く細長い種子島の海の玄関口西之表港に入港します。平成2年からは、超高速船ジェットフォイル「トッピー」が就航しています。飛魚の名のように約90分で海上をトッピーと翔んでいきます。さらに「トッピー2」が就航して1日4往復になり、日帰りもできるほど便利になりました。

南種子町へは、降り立った空港から約30分間、上陸した西之表港からは約60分間、バスで国道58号線を南下します。もっと自由な行



程が希望なら、他にタクシーやレンタカーも利用できます。南下するバスの車窓からは、碧い海と緑の島肌。さわやかな風の吹き抜ける広い畑には、さとうきびやさつまいもが南国のさんさんと降りそそぐ太陽の光を受けてみごとに育っている、のどかで豊かな風景が目映ります。

やがて、バスは、広い台地のほぼ中央に入ってきます。ここが中種子町との境にある長谷地区で、南種子町の入口にあたります。

南種子町は、この長谷地区の海拔212mを最高点として、南へやや傾斜しながら、海拔180m～200mの平坦な台地が、南端まで続いています。町のほぼ中央を国道58号線が、長谷地区から中央の上中地区までと、その先は、町道が南端の西之地区まで、町を東西に二分して走っています。(国道58号線は上中地区から西へ島間港までのびています)

西海岸の方は、100mほどの段丘になって南北に伸び、その下60mほどのところに集落がつけられています。そこからは急傾斜で海岸に迫っているため水田は少なく、段丘には、畑地がずっと広がっています。

南海岸の方は、宮瀬川、郡川、鹿鳴川によって作り出された沖積平野が広がり、種子島で最も広い水田地帯となっています。海岸は、砂丘が多く、基永地区にある宝満の池は、島内一の淡水湖、周囲が1,204mで、その南側は砂丘が迫っており、こ





れを越えるとすぐそこは海です。昔、基永層の一部が沈降して入江になった後、海との間を砂丘がせき止めてできた海跡湖だといわれています。

東海岸は、西海岸のような段丘がほとんど見られず、急崖で海に面しており、波の浸蝕によって奇岩や海蝕洞などのすばらしい景観が作られています。なかでも有名な千座の岩屋は、基永層の波蝕岩の大洞窟で、千人もの人を一度に収容できるといわれる程の極めてスケールの大きい自然の芸術です。

南種子町の土地の利用状況を見ると、総面積の半分以上を林野が占めています。林野は、丘陵地の急斜面や段丘周辺の斜面及び砂丘地に発達しています。

農用地は、約1/4で、田、畑、樹園地（果樹園、茶園、桑園）、牧草地になっています。これらの現況と、集落の位置を示したものが、上の図です。

河川は、比較的長い川が、郡川、大浦川、鹿鳴川、宮瀬川、古川川の5つで、なかでも一番長い郡川の河川延長は6.5kmです。これは、県内の河川、特に160kmの川内川に比べるとずっと短いものです。

気候は、温暖で、年平均気温が20°C余り、冬期でも平均8°Cもあります。ごくまれに淡雪を見る程度、降霜も年に3～4回ほどで、海岸地帯は無霜地帯です。1月から2月にかけて種子島特有の北西季節風が吹きつけます。また、7月から10月にかけては、集中して台風が襲来します。

南種子町は、最南端の門倉岬を境にして、南と東の海岸が太平洋、西海岸が東シナ海に面しています。南から北流してくる黒潮暖流の影響を受けて、海水の温度も透明度も高く、濃紺色に輝く海は、種子島近海の特徴となっています。

このように、南種子町は、温暖な気候に恵まれ、ぐるりと180度は青い海、緑の山野から、



潮騒と野鳥のさえずりが聞こえてきます。また、短いけれど川も流れ、豊かな水田と、肥沃な畑地も広げて自然がいっぱいの住みよいところですよ。こんなところですから、私たちの祖先は、2000～3000年の昔から、この南種子町に集落を作って住んでいました。その暮らしの様子が分かるものをいろいろと今に残していますが、下中地区の長崎鼻、平山地区の広田、西之地区の本村や田代など、東海岸を中心にその遺跡が発見されています。現在の集落は、丘の上や海岸沿いの平地に、町内で58つられています。

地区別集落数・世帯人口

地区	集落数	人口	世帯数
平山	4	678	242
基永	10	692	254
下中	5	309	128
西之	13	1,357	514
西海	4	362	137
島間	5	913	350
長谷	6	477	175
上中	11	2,884	1,067
計	58	7,672	2,867

(平成2年国調)

これらの集落は、大きく八つの地区にまとめられていますが、地区名と地区内の

集落の数、住んでいる人の数や世帯数は、上の表のとおりです。この数は、平成2年の国勢調査のもので、南種子町では、人口が一番多かった年が昭和35年で、約12,600人もいました。ところが、中心地の上中地区を除いて年々減少し、平成2年は約7,700人になっています。(平成4年7,800人)

しかし、今南種子町に住む私たちは、これまで築いてきた先人の数多くの業績を受け継ぎながら、21世紀に向けて活力のある町、ふるさとの香り漂う住みよい町づくりを目指して努力を続けています。



町花サンダンカ

春から夏にかけて見事な大輪の花を咲かせるサンダンカ。一見大輪の花を思わせませんが、実は無数の小さな花弁が集まったものなのです。ちょうど南種子町が、一人ひとりの小さな力で知恵を



町木「山もも」

町民憲章

- 私たち南種子町民は、郷土の自然と伝統を受け継ぎ、愛情豊かな町をつくりたい。
- 私たち南種子町民は、いつも希望をもってまじめに働き、楽しい家庭・平和な町をつくりたい。
- 私たち南種子町民は、きまわりを守り、敬愛を高め、明るい文化の町をつくりたい。

昭和50年1月制定

昭和50年1月に、「町民憲章」(左記)を制定しました。




結集して、よりよい郷土建設を進めている姿に似ています。美しい自然を守り育て、人情豊かな町、明るく未来へ躍進する町へたゆみなく発展するよう、そんな願いを込めて、このサンデンカを町花に制定しています。

南種子町役場の正面玄関前の植え込みに、実に見事な山モモの木が、どっしりと根を張っています。この山モモの木は、昭和61年10月に制定された町木です。

そして、役場庁舎正面屋上の掲揚台には、国旗と並んで、「平和の象徴ハトの上に南種子町の南の字を圖案化し、平和な町と大空にはばたき躍動、躍進する町」を表わした「町章」（昭和37年9月制定）を染めぬいた紫紺の町旗が、底抜けに明るい南国の青空に、全町民の願いをこめて、今日もはためいています。

南種子町町民歌



町章

作詞・作曲 岩坪 敏

一、山むらさきに赤きまき、みなみのくぐらんと
このときに、今なりわたるあけのかね
見よや東海の明けの空
心のまなこを、ひらけよ
希望あふれる、南種子

二、三十二の若にははじぬゆたかに
みのるうららよ、思慕よする海風
うけてのびゆくまじり
これぞ南の玉虫舞
希望あふまじり、南種子

三、みやこの花にあこがれて、いざ行く
人し多けれど、われらは守るこのまよとど
すすむ文化におくれごと
力あわせていかい立つ
希望の抱えたる、南種子

四、あま五開けや、門首のまかまく連の
返らぬを、せいそうすでに幾星華
鼓はうつたし物語
固る町台華々と
希望あふまじり、南種子

五、じゅんかん能を走り行く、観光バス
はなやかに行く春おしほはときす
ああ、南の海の色
大連の旗、おしあてて
希望はてなし、南種子

「山紫に水清き、南の楽土この里に…」と町民歌にも歌われているように、南種子町は、美しい自然がいっぱいの町です。その自然が、四季おりおりに見せる豊かな表情を、春、夏、秋、冬と順に追って探してみましょう。

●「春」

春の光が野山に満ち溢れる南種子町の3月は、山桜の花が緑の島肌映えて、月末には、やわらかい風の渡る田面に、かわいい早苗の影が揺れる田植えの季節を迎えます。田の畦から畦へ白いアオサギが、ゆっくりと舞うのもこの



種子島宇宙センター（吉信射点）

ころです。前之浜の防潮林浜山へ入ると、砂丘へ抜ける一本道をおおいかぶさるような木々の梢から、小鳥のさえずりが聞こえてきます。春の磯浜へ下りると、磯の



千座の岩屋

●「夏」

種子島の季節の訪れは早く、南種子町の初夏の山野は、みずみずしい新芽と、色とりどりの花がさいて、美しい自然がいっぱいです。

人家の庭先に、下向きのトランベットに似た白い大きなグチュラの花が、咲き初めるのもこのころです。

海岸では、名産のナガラメの採取が始まり、海辺の集落では、人々が待ちかねたように海にもぐります。「ナガラメ」は、あわびの一種である「とこぶし」のことですが、種子島ではこう呼んでいるのです。一枚貝で独特の風味をもっていて美味な貝です。

6月になると、緑の大きな長い葉の間から白い花茎が伸びて、やがて、すがすがしい香りをあたりにならわせるシャニン（月桃）も花ざかりを迎えます。この葉で握り飯を包むと、その移り香がたまらないと今でも重宝がられています。



アジサイロード

6月中旬ごろになると、うっとうしい梅雨が続きませんが、その晴れ間、ひときわ目立って咲いている大輪の花があります。アジサイの花で、しっとり濡れた風情



は、また格別です。特に、上中地区から西之地区へ通じるバス路線に咲くアジサイは、実に見事で「アジサイロード」と呼ばれ、白から紫、ピンクへと変色する無数の大輪は、観

光名所門倉岬を訪れる観光客の目を楽しませてくれます。雨にけふる浜辺へ出ると、ハマヒルガオのピンクの花が、あたり一面に咲き乱れています。

南種子町の本格的な夏は、南風の吹き出しで始まります。真夏のざらざらした太陽が、抜けるような青空に輝き、連日30℃をこす暑さが続きます。



ハイビスカス

田んぼでは、この暑い盛りに早期栽培の稲刈りが始まり、農家はとてもしそがしい時期ですが、仕事の合い間をみて、家族中で海へ出かけます。青く涼しい海が人々を磯遊びに招くのです。なかには集落や職場で楽しむ所もあります。

南種子町の海は、どこへ行っても釣りが楽しめます。ブダイ、メジナ、イシダイ、イカなど、夏だけではなく四季を通じて楽しめます。また、貝類も豊富です。小さい子供たちは、磯浜の波打際の岩をおこして、クロミナやアカミナ、コロビなどたくさんとっています。砂浜では、波に乗って打ち寄せられた小さい美しい貝殻を拾って、貝細工を楽しむ人もみられます。このように、南種子町の夏の海は、みんなの遊び心を刺激する魅力に溢れています。

真夏の強烈な太陽の光がふり注ぐ山野には、色とりどりの原色の花が、鮮やかに咲き乱れます。

真夏を彩る第一の花は、ハイビスカスです。深緑の葉っぱに映えて冴える真紅や黄の原色の花、一重や八重の華麗な花に、ツマベニ蝶が戯れるのも、このころです。ツマベニ蝶は、種子島を北限の生息地とする南方系の美しい蝶です。

その他、赤紫色のブーゲンビリア、真赤なカイコウズ、南種子町の町花サンダンカの朱色など、目もさめるような色どりです。

平山地区の大浦川の附近、昔の塩田跡の半塩水に生える熱帯植物メヒルギも、かわい花を緑の木いっばいに咲かせます。

この植物は、珍しい胎生植物で、やがては、そのまま幹になる細長い草色の実をつけて水面に落とします。蘇鉄の濃緑の葉や無数の気根を垂らすガシュマルの大木も、南国の夏を強烈に印象づけてくれます。種子島宇宙センターのある竹崎海岸などには、白い花をつけた浜木綿の群生も見られます。



メヒルギ自生地（平山浜田）

集落の人家の庭先や裏の畑の一角に、芭蕉の群生をよく見かけます。巨大な緑の葉っぱを青空にそよがせ、その葉の間からのぞく房なりのバナナが涼味をさそい、いかにも南国情緒豊かな景観です。

西海岸の道路沿いに、アザミが群生しています。8月の野菜の少ない時期に、このアザミの茎は食用として重宝がられ、採取する人々の姿が見られます。

●「秋」

9月に入ると、芙蓉の白い大輪の花が咲き始めます。種子島の山野にはどこでも自生していますが、南種子町では、特に上中地区から西海地区へ下りるバス路線沿いの山の斜面に数多く見かけます。

高さ2m～3mの木に、手のひらのような葉をつけ、白色五弁の花をいっぱいつけるのが芙蓉です。緑の山野に、白や淡紅の大輪の花が群がり咲くようすは、とても鮮やかで、10月いっぱい人々の目をひきつけてしまいます。

秋たけなわの10月、とはいっても、南種子町では、日中はまだまだ厳しい残暑が続きます。この厳しい残暑の中、忙しくなるさつまいもの収穫までの合い間をみて、各集落では秋祭り（願成就）が盛んに催されます。南種子町のロケット太鼓が、秋空いっぱいにとどろきわたるふるさと祭りもこの時期に催され町民総出で大変なにぎわいをみせます。



秋祭りの大踊り（郷土芸能）



芙蓉の花

白や淡紅の芙蓉の花ざかりを、車窓に見ながら、鉄砲伝来の歴史の潮騒を聞く門倉岬から、宝満の池や宇宙センター・千座の岩屋など、すばらしい景勝と史跡を訪ねて、観光バスや貸切りバスがしきりに町内を駆けめぐるのもこのころです。

11月、紅葉狩りのニュースが、TVから流れても、南種子町の山肌は、四季を通じて緑一色です。たまに、カエデやハゼの鮮紅が、マツやシイなどの常緑樹の間に映える風景を見ることがありますが、TVで放

映される北国のような秋の深まりは見られません。南種子町の秋は、いつまでも暖かいのです。

ながい夏がようやく過ぎて、いつの間にか秋になり、その秋も、ずっと長く続いて、やがて寒くなってきたなど気がつくころは、本土では、もう雪の舞う季節になっていることを、TVの放映で知るので。

●「冬」

1月から2月にかけて、北西の季節風が吹きつけて、ようやく冬らしく寒くなります。雪はほとんど降りませんが、北西の季節風が吹きつける夜などは冷えこんで暖房がほしくなります。それでも、種子島の天候は、2～3日の周期で変わります。1日北西の風が吹いて、海が時化、寒さがつのると、それがうそのように止んで、暖かな小春日和になります。それも1、2日で、また、北西の季節風が吹きつけて、寒さが舞い戻るとというのが島特有の冬の天気です。

このような日々を繰り返しながら、少しずつ少しずつ春へ近づいていくのです。

やがて、ツブキの新芽が伸び始めると、南種子町に再び春がめぐるってきます。

「循環線を走り行く、観光バスは華やかに、行く春惜しむホトトギス、ああ南の海の色」と南種子町民歌に歌われているように、自然を満喫できる海と景勝地に、魅せられて、たくさんのお客が訪れています。

なかでも、「大自然の雄大な景観、絶景である」といわれる南種子町の美景を八つここに紹介しましょう。



①浜田海浜地一帯

この海浜地は、波で浸蝕された奇岩の一帯である。中でも、千歳の岩屋は、種子島唯一の自然の匠、海蝕洞窟で千人は産れると言う所で有名である。また、昔からの種子島唯一の湯治場のあるえびの湯から広田海岸、そして大崎宮宿崎を望めば、珊瑚礁に跨ける白波の雄大さと、果てしなく広がる青い海岸とのタイアップは、人生のロマンを感じる眺望である。



②宝満の池一帯

宝満神社に保存伝承されている「赤米」は、稲の最古の品種といわれ、「神米」としての「御田植祭り」は現在も毎年行なわれる有名な祭事である。

宝満池の周辺は4kmを超える広さを持ち、冬には数多くの水鳥が飛来し、中でも鶴の乱舞が一見に値する。付近一帯の緑と遠望の海蝕奇岩の竹崎海岸の眺めは絶景である。



④宇宙センターおよび竹崎海岸一帯

宇宙科学の基地及び竹崎海岸は、青い海と白い砂、雄大な景観のなかに放送衛星など各種実用衛星の打ち上げが行なわれる。白く聳え立つ発射台、宇宙開発展示館、広い芝生の憩いの広場、カモリの峰に登れば宇宙から地球を眺めているような380度の眺望となる。



⑤門倉岬と七色板一帯

門倉岬に通じる直線700mの道路は、まるで前方に広がる海中に突き進んで行くような爽快感を感じるその名も、海中ロードという。そこを経て門倉岬に入れば、種子島の最南端日本の歴史を変えた鉄砲伝来の地がある。黒潮の流れが青い種子島の歴史と文化を感じさせられる展望所からは、遠くに日本の宇宙基地種子島宇宙センター、白い砂丘、380度開れば何処までも続く青い海、また380度開れば九州一の道峰屋久島が目前に聳え立つ、すばらしい景観。

さらに、門倉岬を出て、名付けて七色に行くとき春、夏、秋、冬、のそれぞれの特色のある景色が眺められる。まことに絶景である。



④前の浜海浜地一帯

イギリスの帆船、ドラムエルタン号の漂着とともにインギー島も伝来し、異国交流の由緒地である。

また、ここは縄文晩期の長崎鼻貝塚遺跡がある。大自然の海浜地と太平洋の海原を眺める都川河口防波堤は、雄大な海中展望台となっている。



⑥宇宙ヶ丘公園からの眺望

本町最大の宇宙ヶ丘公園は、自然豊かななかに各公園施設、各種イベント広場、長谷資料館がある。公園内展望所から東方に太平洋を望めばロケット発射台が見え、ロケットの打ち上げ時には観覧者で賑わう所である。

また西方には、屋久島道峰も眺められる。

自然保護指定地域

- 門倉岬から浜田大浦川まで海岸線一帯
- 鉄砲伝来碑を中心とする半径100m
- 木村突止石半径100m
- ドラムエルタン号標着の碑半径300m
- 堀土留を中心とする半径500m以内
- 池ノ山(ヘゴの原生林)
- メヒルギ自生地200m
- 長崎鼻遺跡半径200m
- 宝満の池神社を中心とする半径400m
- 赤米神田(宝満神社)半径50m
- ① オニハス(レンゲ)
- ② 阿武隈メヒルギ自生地
- ③ 釜永吉徳崎より平山大浦川までの海中
- ④ 広田遺跡石碑中心に半径100m
- ⑤ 砂塚孫左衛門の碑
- ⑥ 神社中心半径500m
- ⑦ 上郷城址
- ⑧ 宗教弾正墓
- ⑨ メヒルギ自生地(大浦川)
- ⑩ 千座の岩屋を中心とする北の砂丘1,000m
- ⑪ 浜田海岸小島公有水面





① 野大野立石から観る屋久島の眺望

町内唯一の高い台地から眺めて、遠くは東支那海に浮かぶ島々、時には本土鹿児島も見えること、中でも時には雪化粧した九州一高い屋久島連峰、眼下には、眺める最大の観光資源、砂坂孫左衛門翁の拓いた道、史跡も眺められる。

その史跡と翁の偉業を想い浮かべながら沈み行く夕日と屋久島の雄大さを眺望できる。

また、夜には屋久島の夜景、サバ釣り船の漁火に、東を望めば上中の市街地の夜景も絶景である。



② 島間小学校からの眺望

伊弉志尊の種子島測量開始の地としても有名な、南種子町の玄関口である島間港を眼下に、さらに雄大な屋久島も遠望できる絶景の地である。

南種子町指定文化財一覧表

番号	区分	名称	所在地	所収施設(管理)	指定年月日
町1	寺堂資料	阿口	南種子町 下中八幡	阿口八幡 神社神宮	S42.3.31
町2	墓	彦敷	南種子町 山	平山町上 文化継存会	S43.3.31
町3	"	墓	"	"	"
町4	神社民俗 文化財	宝満神社赤 石印植え祭	南種子町 赤石	宝満社三 公民館	S42.3.30
町5	"	下中八幡神 土印植え祭	南種子町 下中	下中八幡 公民館	"
町6	史跡	家門	南種子町 阿波	阿波島 塔	"
町7	芸能	西之巻舞 楽	南種子町 西	西之地區 公民館	"
町8	神社民俗 文化財	広田石塔祭	南種子町 山	広田自治 公民館	"
町9	史跡	広田遺跡	南種子町 山	"	"

(平成4年10月1日現在)

番号	区分	名称	所在地	所収施設(管理)	指定年月日
町10	名跡	阿波前之法 自然公園	南種子町 阿波	南種子町 公民館	S42.3.30
町11	史跡	赤穴	南種子町 山	広田自治 公民館	"
町12	"	砂坂孫左衛門 の跡	南種子町 西	南種子町 "	S55.3.7
町13	"	上巻神社	南種子町 島間字内	"	S56.1.1
町14	地誌 史跡	伏波宮	南種子町 西	南種子町 "	"
町15	地誌 史跡	大坂山のヤ ツ草及び石塔	南種子町 島間字大坂	大坂自治 公民館	"
町16	地誌 史跡	田代化石	南種子町 西	南種子町 "	S56.4.11
町17	史跡	種子島製塩 所	南種子町 西	下中自治 公民館	H3.5.1
町18	記念物	インオー島	町内一 島	町内第一 島管理会	H4.9.14

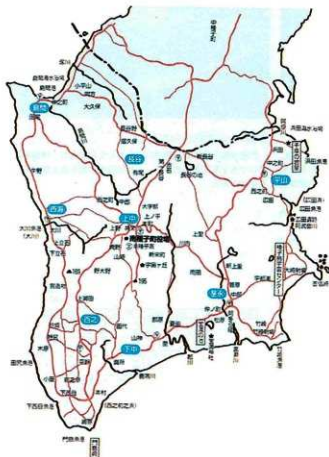
人情豊かな南種子町は、民族芸能の宝庫ともいわれています。

宝満神社の赤米お田植え祭りや座敷舞・蚤舞などの民族芸能や、鉄砲伝来紀功碑や上妻城址、日本最古の文字が発掘された広田遺跡等、数多くの文化財が指定され、保存されています。

上の表が、南種子町の指定文化財一覧です。

第二章 心のふるさとをたずねて

—— 南種子町周遊 ——

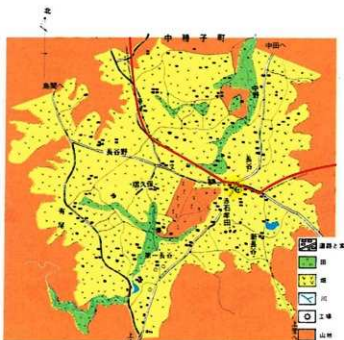


南種子町は、8つの地区に分かれています。

- ① 長谷地区～昭和22年につくられた新しい地区です。
- ② 平山地区～民俗の宝庫です。また水田が多く、基永・下中地区とともに種子島の穀倉地帯といわれています。
- ③ 基永地区～町内一の水田地帯です。米の原種といわれる赤米のお田植え祭り、種子島宇宙センターがあり、宇宙に一番近い地区ともいえます。
- ④ 上中地区～南種子町の真ん中であり、政治・経済・文化の中心地です。
- ⑤ 下中地区～田が畑地の倍もある水田地帯です。漂着船(明治27年)の乗組員を救助したお礼の「インギー鳥」を今も大切に飼っている地区です。
- ⑥ 西之地区～南の台地に広がる畑地の多い地区です。観光の名所門倉岬はこの地区にあります。門倉岬には「鉄砲伝来紀功碑」が建っています。
- ⑦ 西海地区～目の前に屋久島に見える西海岸にある地区です。魚介類に恵まれた海岸で漁港もあります。種子島製塩 初の地^{はじまり}でもあります。
- ⑧ 島間地区～南種子町の海の玄関にあたる地区です。2000t級3バースも完成し種子島第二の大きな港のある地区です。

自然がいっぱい、色鮮やかな花や緑、うるおいに満ちた町。歴史の潮騒を聞きながら、大自然の恵みに触れる町。宇宙への開かれた窓から未来へ進行形の南種子町の各地区を、ひとめぐりしてみることにしましょう。

1 台地に広がる長谷地区



長谷地区

へ1kmほど行くと、昭和22年創立の長谷小学校もあります。

この長谷地区は、明治の頃までは、マキといって馬の放牧地でした。明治になってからは、原野になっていましたが、太平洋戦争後、南の島からの引揚者を始め、県内の各地から集まってきた人たちの手で開拓事業が進められました。

戦後の機械などほとんどないころで、入植者は、ナタやカマ、クワなどを主な道具に、人力だけで十数年間の苦勞の末、今の

ようなりっぱな畑地につくり変えていったのです。当時の開拓の苦勞をしのばせる碑文が、長谷小学校の校庭に建てられています。

開拓当時およそ300戸も住んでいた長谷地区でしたが、今は170戸、501人(平成2年国調)が居住し、大部分の人が農業を営んでいます。さとうきびやさつまいもを主に、他にたばこなどを栽培しています。なかには、蚕や牛を飼っている農家もあります。

国道58号線を、西之表港から約60分、種子島空港から約30分南下すると、車は広がる台地のほぼ中央に入ってきます。

車窓からは、もう海は見えません。

国道58号線と交差する道路を境に、北は中種子町、南が南種子町の長谷地区になります。

広々とした台地は、さとうきびやさつまいもが豊かにみのりりっぱな畑になっています。

十字路には、雑貨店が数軒と簡易郵便局、すぐ近くに農機具店やコンクリート工場があります。西



長谷地区

2 米作りのさかなな平山地区



長谷地区の十文字を、信号機の青の合図で左折し、東海岸へ向かってしばらく行くと、前方に宇宙センターの白い建物と青い海が見えてきます。そこからの坂道を下りきったところに人家があり、ここから集落に入ります。ここが平山地区です。海は見えませんが、東の方にある林のすぐ向こうは、太平洋です。

平山地区は、南種子町の北東にあって、4つの集落からできています。まわりを山に囲まれて、その間にずっと水

田が広がっています。

種子島で最も水田が広い地区の一つなので、種子島の穀倉地帯といわれています。戸数は、242戸、678人（平成2年国調）の人が住んでいて、大部分の人が米作り中心の農業をしています。

また、米作りのほかに、たばこを作ったり、近ごろでは、メロンやボンカン、タンカンなどの園芸にも積極的に取り組み、所得向上に努めている農家もあります。

なかでも、ボンカンやタンカンのみかん作りは、町内で最も盛んです。山を切り開いて作った果樹園では、暖かい気候を利用して、他の産地より早く収穫し、大阪や東京方面へ出荷しています。



ボンカン収穫

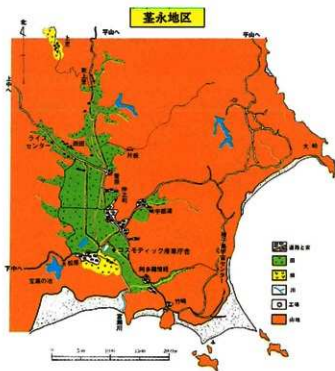
平山地区には、広田と浜田の集落にそれぞれ小さな漁港があります。農業のかたわら、船をもって漁業をしている人もいます。

その他、平山地区には、浜田の海浜一帯の景勝や、種子島の歴史を物語る広田の遺跡などたくさんあって、観光客がよく訪れます。なかでも、広田遺跡は、日本最古の文字を刻んだ貝符の出土で有名です。また、浜田の海浜には、種子島唯一の自然の匠、一度に千人は、座れるという巨大な海蝕洞窟で知られる千座の岩屋もあります。そのうえ、この海岸は、遠浅なので海水浴場として利用され、毎年10000人以上の海水浴客でにぎわいます。また、ここには明治時代に発見された冷泉があり、怪我や神経痛などに効用があるといわれ湯治客が絶えません。昭和57年には、町営の平山温泉も開設されています。

浜田集落から県道へ出て少し行くと、広々とした湿地帯が左手に見えてきます。昔の塩田跡で、ここに珍しい胎生植物メヒルギの群生をみることができます。

平山地区の人たちは、昔から平山に伝わる文化・伝統を守るために、平山郷土民俗館を設置（昭和44年～54年）して、文化遺産を大切にしてきました。現在は、上中地区の宇宙ヶ丘公園の敷地内に設置された「南種子町郷土館」（昭和61年オープン）に展示、保存されています。平山地区の座敷舞や蚤舞は、県の無形民俗文化財として指定されています。

3 水田の広がる葦永地区



平山地区から、南へ峠を越えると、広々とした水田が見えてきます。ここが葦永地区です。

地区のほぼまん中をゆったりと流れて海へ注ぐ宮瀬川の流域に、約300haの水田が整然と広がっています。ここも平山地区と同じように、種子島の穀倉地帯です、戸数270戸、人口721人（平成2年国調）で大部分が稲作農家です。

葦永地区の水田は、明治から大正にかけて耕地整理や排水工事が行なわれたので、今

のようなりっぱな水田になっています。

水稲の栽培法も、以前はホイトウといって馬を田の中に入れ引き廻して行った足耕から牛耕、そして馬耕へと変わってきましたが、昭和36年ごろから、田面にエンジンの音が響き渡る機械化へと進んできました。田植えも機械、除草も防除も除草剤や農薬の普及で、機械化と共に進み、ヘリコプターによる空中散布も行なわれるようになりました。また、昭和16年には、早期栽培も始まりました。昭和44年には、基永ライス



ヘリコプターによる防除

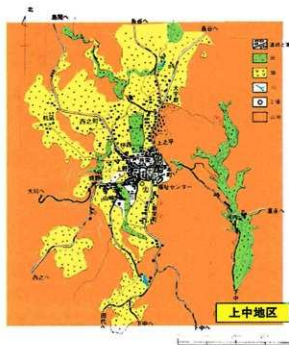
センターが建設され、自主流通米の出荷が始まって、日本一早いコシヒカリの出荷で、早期水稲の産地として全国的に知られるようになりました。昔は二期作が盛んでしたが国の米作減反政策のため、今は、うら作として収入の多いえんどうやカボチャ作りに力を入れている農家もあります。

基南小学校から2kmほど南へ行くと、竹崎海岸へ出ます。ここには小さな漁港もあって小型の漁船で、沿岸漁業をしています。また、たいへん景色の美しい海岸で、大きなホテルも建っています。

わが国最大の規模を誇るロケット打ち上げ基地で、毎年大型の実用衛星を打ち上げている「宇宙センター」も、この竹崎海岸にあります。雄大な自然の景観と、基地の施設が見事に調和して、種子島有数の観光地になっており、観光客がたくさん訪れています。

種子島最大の海跡湖「宝満の池」も、この基永地区にあります。この池のほとりに、赤米のお田植え祭りで知られる宝満神社があります。赤米は米の原種だといわれ神田に植えられますが、その古式豊かな祭りは、町の文化財に指定されています。

4 南種子町の中心地にある上中地区



南種子町役場のある上中地区は、南種子町の中央にあって、町内で最も多い2884人（平成2年国調）の人が住んでいます。

役場の他に、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校や、銀行、郵便局、農協、病院、バス発着所、消防分遣所やいろいろな会社などもあって、勤めに出る人がたいへん多いところです。

商店街は、役場のあるところから北の方へ道の両側に商店がずっと並んでいます。各地区にある商店は、大部分が雑貨店ですが、上中地区で

は、専門店が数多くある他、スーパーマーケットや飲食店、旅館やホテルなどもたくさんあります。

その他、役場の周辺には、公共施設として、農業者トレーニングセンター、福祉センター、図書館や、夜間照明の完備した陸上競技場・野球場もあって、広く利用

されています。市街地に隣接した山崎集落には住宅団地が作られています。この住宅団地から南へ1kmほど行くと、宇宙ヶ丘公園があります。町内最大の公園で、広々とした敷地には、森林浴を楽しんだり、池の周りを



上中市街地

を巡る遊歩道が作られています。また、レジャーセンターとしての施設や各種のイベント広場、小動物の飼育舎等があり、町民の憩いの場として親しまれています。

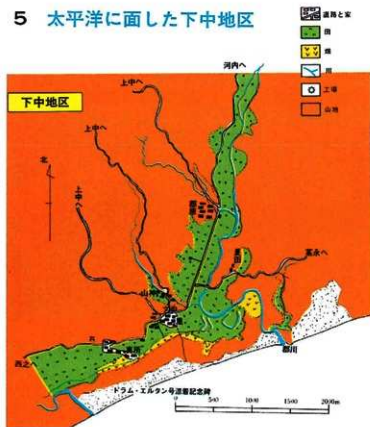
広い公園の敷地内には「南種子町郷土館」も整備されて、町内の自然・歴史・民

俗等についての資料が展示されています。公園の東側には、展望台があります。台上にのぼると、東方に遠く太平洋の大海原が果てしなく広がり、手前には、宇宙センターの白い発射塔も望めます。また西方には、平成6年4月に開校する、統合中学校の「風格があり町のシンボルとなる建物」の片鱗を見せて、着々と進む、校舎の建設現場がすぐそこに見られます。そして、その向こうには、九州一高い屋久島の連峰も眺められます。

宇宙ヶ丘公園は、その名のように、宇宙センターから打ち上げられるロケットの見学に最適の場所で、ロケットの打ち上げの時はたくさんの観覧者でにぎわいます。近くに勤労者体育センターがあり、公式のテニス場や、町営の広いゲートボール場も作られ、多くの人に利用されています。

上中地区から北へ長谷地区までの国道58号線の沿道には、ブロック、生コンクリート、碎石場や車の修理、石材、竹材、等の工場や、町森林組合の製材工場もあって、操業しています。なかでも、大宇都の有尾工業団地内にある日本液体水素工場は、宇宙センターから打ち上げるロケットの燃料を主に作り出しています。工場は、作業の管理にコンピューターを使うなど、近代的な設備を備えた町内最大の工場です。その他、茶工場やでんぶん工場、焼酎工場などもあります。

5 太平洋に面した下中地区



上中地区の宇宙ヶ丘公園から、山の坂道を下ると、やがて小さな学校を左手に見る三文字に出ます。ここが下中地区です。戸数128戸、人口309人(平成2年国調)の町内で最も人数の少ない地区です。小学校は花峰小学校といえます。この小学校では、珍しいインギー鳥を飼育しています。インギーというの

は、南種子町の方言でイギリスのことです。明治27年にこの地区の前の浜に漂着したイギリスの帆船ドラム・エルタン号の乗組員を救助したお礼にもらい受けたニワトリが、このインギー鳥です。今も苦しい戦後を乗り越えて、この珍種を守り続けている下中地区の人たちの純朴さがよくわかります。町では、このニワトリを町の文化財に指定して、その原種の保護に努めています。

下中地区は、前頁の地図をみてもわかるように、水田が畑に比べてたいへん多い地区です。



下中地区

町内で一番長い郡川に沿って開かれた水田は耕地整理が進んでおり、農道も農作業に都合のよいように整備され、用水路もきちんと作られています。

里集落から郡原集落の近くまで、約1200mの直線道路が広い水田を二分して走っています。町内で直線距離が一番長い道路です。

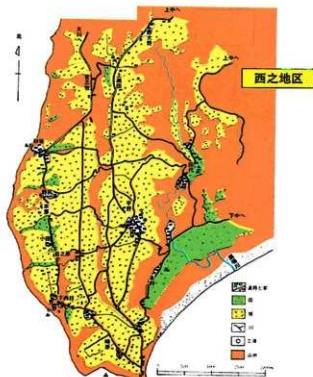
下中地区の人々の仕事も農業が中心で、米を多く作っています。水稲の栽培法も基永地区と同じで、ここでも、うら作にえんどうやカボチャ作りがさかんです。また、水田がさとうきび畑にかわったところもあります。

里集落から真所集落へ足を伸ばすと、前方右手の山手側に鳥居があります。下中八幡神社で、ここには約570年前奉納されたという県文化財指定の青銅製の鰐口があります。この神社でも、基永地区の宝満神社と似て、神田でのお田植え祭りがあり、町の文化財に指定されています。

西之地区の門倉岬から、下中地区を経て、基永地区の竹崎まで、およそ10kmにわたる白砂青松の前の浜は、大自然の海浜地と太平洋の海原を眺める景勝の地です。

この保安林砂丘に、インギー鳥の歴史と温かい里人の人情を物語るドラム・エルタン号漂着の石碑が建立されています。

6 南の台地に広がる西之地区



南種子町の最も南にある地区で、集落は町内で最も多く13あります。戸数514戸1357人(平成2年国調)の人が住んでいます。

西之地区は、西半分が広々とした台地で畑、東半分が水田の多いところになっています。西半分の台地には、耕地整理のすんだ畑が広がり、機械を使って主にさとうきびやさつまいもが栽培されています。その他、たばこやお茶を作っている農家もあります。また、広々とした丘を利用し

て酪農も行なわれています。

西之地区の小学校・中学校は、平野集落にあります。商店や郵便局、農協の支所などもあってこの地区の中心地になっています。西野小学校のすぐ上にある本国寺には、古くから踊り継がれてきた盆踊りがあり、町の文化財に指定されています。

平野集落から坂道を下りきると、西之地区の東半分にあたる水田の多い本村集落に着きます。

鹿鳴川の流域に広がる水田地帯です。ほ場整備の完成した水田を南に見ながら鹿鳴川を渡ってしばらく行くと道は三文字になります。そこを北の山手に折れて登っていく途中で、田代化石に出会います。約500万年前のカキや二枚貝、巻貝などの幾種類もの貝が一緒になって、しかも転石のようにして出てくるのは珍しい化石だそうです。また、生物の進化など



西之地区(本村)

いろいろなことを知る貴重な手がかりにもなるということで、町指定の文化財になっています。

西之地区の西海岸は、100mの海岸段丘が広がっています。なかでも、途中の砂坂から立石の間は、断崖絶壁で、昔は、道路のない難所でした。ここに独力で7年の歳月をかけて新道を開いた「砂坂孫左工門」の頌徳碑が建てられています。

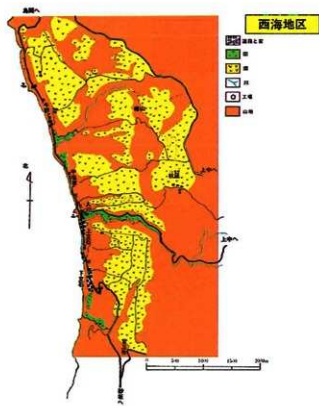
西海岸の砂坂と下西目には漁港があります。砂坂集落や下西目集落では、農業のかたわら船をもって、沿岸漁業にも精を出しています。

砂坂から、野尻・木原・小田・前之原・下西目といくつかの集落を経て南下すると、種子島の最南端、門倉岬に着きます。岬は、海面から数十mの高い断崖で、下の磯は、1543年ポルトガル船が漂着し、日本に初めて鉄砲を伝え、日本の歴史に大きな影響を与えたところです。この記念すべき事実を永遠に伝える「鉄砲伝来紀功碑」がこの岬に建てられています。漂着したポルトガル船の形を模した展望台に登ると、目前には濃紺色の大海原、太平洋が、東に目を転じると湾曲した白砂青松の前浜が、宇宙センターのある竹崎海岸までずっと続いています。西は、海上にくっきりと浮かぶ洋上アルプス、屋久島の連峰を見ることができます。ここは、歴史の潮騒を聞きながら、種子島一の景勝を眺望できる観光の名所になっています。

7 西海岸にある 西海地区

上中地区から西海岸へ4kmほどの坂道を下ると、磯の香がして小さな漁港に突きあたります。ここが西海地区で、小学校のある大川集落です。

この大川集落を中心に、海岸に沿って南北に通じる道路ぞいの、南の方には上立石、下立石の集落と、北の方には牛野集落が細長く続いています。海岸沿いの道路を行くと道路沿いの人家は、みな石段やブロック塀で囲まれています。これは冬になると、青い



海のすぐそこに迫る屋久島から、強い西風が吹きつけ、ひどい塩害を被るので、これを防ための工夫だということです。

海岸は、岩が多く、イセエビ・ナガラメ・クロダイなどの魚介類に恵まれています。

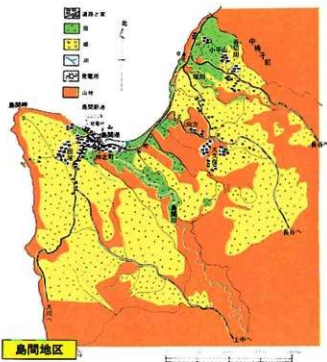
田畑は、人家の近くには少しあるだけで、畑は50mほどのぼった台地に広がっています。地区の人たちは、農業を主にさとうきびやさつまいもを栽培するかたわら海に出て漁もしています。

大川集落から南へ橋を渡ると、上立石集落です。海岸の波打際には、10m四方の狭い範囲に枕状熔岩が見られます。町指定の文化財です。

となりの下立石集落は、種子島における製塩業のはじまりの地とされています。種子島領主平信基公が、日常生活の中での塩の必要性を感じ、下立石に塩釜を築いて塩たきを始めたのは、建仁元年（1201年）だといわれています。集落にある塩釜神社には、信基公が鎌倉から持ってきたといわれる土器（カメ）が奉納されています。「塩釜伝」によると、これは苦塩を貯蔵するカメだということです。



西海地区を望む



8 南種子町の玄関 島間地区

西海地区の南端にあたる牛野集落から4kmほどで島間地区へ出ることができます。

島間地区には、南種子町の海の玄関口にあたる島間港があります。

島間港は、歴史のある港で、ずいぶん昔から利用され、沖縄や大阪への海の旅（運送・貿易）も活発に行なわれていました。

汽船が入港するようになったのは、明治になってからで、

年を追うごとに各地から貨客船や漁船も入港するようになりました。それに伴って、港の整備や拡張工事も度々行われ、しだいに大きくなってきました。現在では、新港とよばれる港は、2000t級3バースも完成して、大型貨物船が接岸できるようになり、石油やセメント、飼料や肥料などを荷揚げし、島の産物の米やでんぷん、雑穀などを積み出しています。

昔の港は浅くて、大型船は沖がかりでしたので、ハシケで港と船の間を往復して、人や荷物の積み降ろしをしていました。それを女の人がしていたの



島間新港

で女仲仕の港とよばれていましたが、もうそんな光景はみることはできません。

新港には、屋久島の宮之浦港とを結ぶ定期カーフェリー「第二太陽丸」が毎日1往復就航しています。そのため、港の近くには、事務所やその他、倉庫、石油タンクなど建ちならんでいます。新港に隣接している旧港には、多くの漁船が出入港しています。港には、南種子町漁業協同組合の事務所や魚市場もあって、漁業が活発に行われています。

島間港の歴史のなかに「伊能忠敬」の上陸があります。文化9年(1812年)伊能忠敬は、種子島の測量のため、屋久島から島間に上陸したのです。中央の歴史上の人物が、南種子町に直接関係をもつことは数少なく、特異な存在といえます。

新港の近くには、昭和56年から九州電力新種子島発電所が建設されて、操業しています。

港から北東の丘の上に小学校があります。この一帯は、自然の地形をたくみに生かした山城の跡で、上妻城跡と呼ばれています。

今でも、土塁と掘り切りが当時の姿を残しており、町では文化財に指定して保存に努めています。

上妻城跡の近くに上方神社があります。この境内に牧の神(馬頭観音)を祭っています。馬の飼育が盛んで、牧の神の信仰が深かったことがうかがえます。長谷地区へ出る道路をはきんで、上方神社のある方が向方集落で、道の向こう側が大久保集落になっています。この大久保公民館の近くの大塚山に、我が国の植物の珍種のひとつで、植物学上貴重なヤツコ草の群生がみられます。

島間地区には、5つの集落があり、戸数350戸、913人（平成2年国調）の人が住んでいて、主に農業を営んでいます。地図を見てわかるように畑が多く、東の方の高い台地に広がっています。さつまいもやさとうきび、たばこなどが作られています。

島間地区で水田の多いところは小平山集落ですが、ここは昔は水源がなくて田が開けず困っていた

ところでした。今から400年ほど前、ここに用水路を築き田を開いてくれた恩人「重遠妙恩」を祭った滝口神社があります。

島間港から、再び南種子町の中心地上中地区へ、国道58号線が伸びています。



島間漁港

第三章 南種子の歴史

“ふるさとの歴史と文化の香りをたずねて”

“火繩の里から、宇宙への玄関みなみたね”

1 南種子の史跡を尋ねましょう。

(1) 縄文時代の南種子

縄文時代は、縄文土器や打製・磨製の石器を用いて狩猟や漁撈によって生活した時代で、今から約1万年前から2300年前ごろまで続いた文化です。住居は竪穴式住居か、また、自然の洞穴などに住んでいました。

南種子町で発掘された縄文時代の遺跡は、次のとおりです。

ア、長崎鼻一陣貝塚	下 中	縄文晩期
イ、丸田遺跡	西 之	縄文後期
ウ、田代遺跡	西 之	縄文早期
エ、上瀬田遺跡	西 之	縄文後期
オ、田尾遺跡	島 間	縄文後期
カ、永谷山遺跡	長 谷	縄文早期
キ、赤石牟田遺跡	長 谷	縄文早期

縄文時代の区分は、大きく分けて、早期・前期・中期・後期・晩期の各期に分けられています。さきに挙げた遺跡から出土した土器や貝塚から、この時代には南九州の土器文化が種子島に伝わったことがわかっています。



長崎鼻一陣遺跡（下中）

●長崎鼻一陣貝塚

長崎鼻一陣貝塚は、下中郡川々尻から東へ約500m、基永寄りの海岸砂丘地にあります。昭和30年の、22号台風の潮害によって一部砂丘地が壊され、土器や貝・獣骨

などが発見され、日本考古学会々員の盛園尚孝氏らによって調査されました。今でも砂丘地に、無数の貝殻が露出しているのを見ることができます。

●丸田遺跡

丸田遺跡は、西之本村丸田にあります。基永一下中一西之本村を結ぶ県道と、上中一田代を通過して本村にくだる町道と接する三差路の北西側にある丘陵地帯の中にあります。

この遺跡は、南種子町郷土誌編さん事業の一つとして調査されたもので、土地の



丸田遺跡遠景

所有者は、笹川保氏で、昭和60年3月14日～20日に第1次調査、8月1日～11日にかけて第2次調査が実施されました。この遺跡からは、縄文時代前期から後期、弥生時代、さらに、古墳時代までの長い期間にわたって生活が営まれていたことが、出土した土器から判明しています。

丸田遺跡の南前方は、郡川・鹿鳴川の流域で種子島最大の水田がひろがり、付近の地名からも、古代の種子島を探る重要な遺跡の一つとされています。

(2) 弥生時代の南種子

●広田遺跡

弥生時代の遺跡では、日本最古の文字といわれる「山」の字で知られる広田遺跡があります。

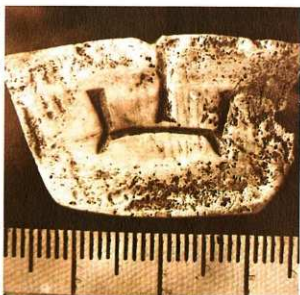
場所は、平山広田港から北東へ約350mの海岸線に面した砂丘地にあります。

この遺跡は、弥生時代の埋葬遺跡としても有名で、およそ113体に及ぶ埋葬したままの人骨と、埋葬された人骨を再び集めて埋葬した



集骨再埋葬人骨の出土状況

人骨が発見されています。また、多数の遺物も発見され、特に、貝符に刻んだ隷書体とみられる「山」の字が発掘されました。文字の歴史では、中国の殷王朝の甲骨文が漢字のはじまりとされていますが、貝符に見られる「山」の字は、中国漢の時代(西暦200年から220年ごろ)に完成した隷書の字体で、このころの文字と見られています。弥生時代は、中国の漢の時代にあたりますので、日本では一番古い文字の発見といわれています。



「山」の貝符

広田遺跡は、土器文化の上から北九州の土器文化が入り、後期になってからは、広田独自の土器も作られていたことが分かり、また、副葬された貝製品は、九州近

海には生息しない、ゴホウラやイモガイなど、南海産の貝を利用していることや、貝符の文様は中国系のもので、この時代に南方の埋葬習俗と、中国の古代文化が広田に伝わっていたことが分かります。

弥生時代の遺跡としては、広田遺跡の外に、次の遺跡が発見されています。



トウテツ文様貝符

遺跡名	場所	時代
ア、浜田遺跡	平山	弥生中期
イ、本村塚の峯遺跡	西之	弥生後期
ウ、本村丸田遺跡	西之	弥生後期
エ、宇都遺跡	西之	弥生後期
オ、仲之町遺跡	鳥間	弥生後期
カ、長谷遺跡	長谷	弥生後期

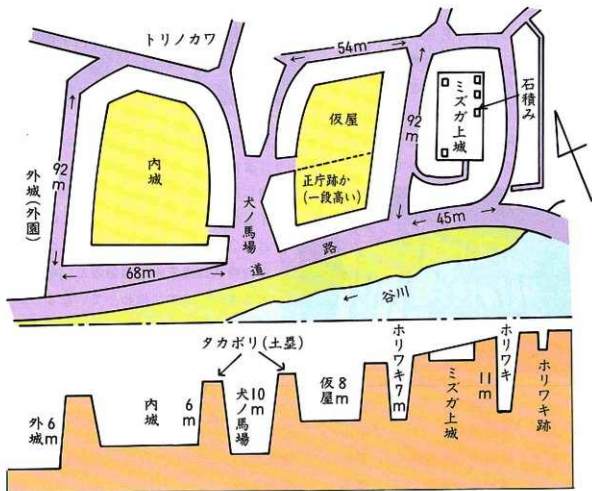
(3) 上妻城（島間城）

① 所在地

島間港の北方約6kmの地点にあり、標高90~110mの丘陵地で、島間向方小字内城・外園にあります。

② 構造・形態

城郭は、内城・仮屋、水上城（ミズガウエ）の三つの郭から形成されていて、城の形態で分類すると連郭式と思われます。



地形的には、内城が一番低く西側にあたり、中央に仮屋、東側に一番高い水上城があります。

内城は、政治をする館ですが、土塁の外周は東面59m、西面92m、南面68m、北面47m、合計266mで、土塁の高さは5m~6mあります。

仮屋は、領主の住まいの跡で、面積は約2500平方mで長方形をしています。

仮屋の土塁は、内城と同じ大きさの土塁を巡らして入口は、犬の馬場に面しています。

水上城は、この城の一番重要な所で一段高いところにあります。一部破壊されていますが、連郭式の形態がよく残されています。また、この城は、中世(鎌倉時代)の種子島代官上妻氏の居城であったと言い伝えられているところから、土地の人々は上妻城と呼んでいます。上妻城は、中世における城としての特徴を十分に残していることから、南種子町は、文化財に指定しています。

(4) 火合峰

「火合峰」は、昔の「のろし台」(火をたいて煙を出し、味方に合図を送るための台)があったところといわれています。図1は、種子島にあった主な「のろし台」の跡で、①は、島間の火合峰、②は、西之表住吉の火立峰、③は、西之表大崎の火立峰で、線で結んでいるように、島間から西之表に向かって合図の「のろし」を上げた所といわれています。また、屋久島の宮之浦にも「のろし台」があり、島間の火合峰と連絡をとっていたといわれています。

「火合峰」は、島間大久保集落の南にありますが、今は畑になっています。ここから西に目をやれば、島間港を目の下に、遠く屋久島を望み、北は、中種子町の西海岸や、住吉の火立峰がくっきりと浮かんで見えます。住吉の火立峰は、住吉中学校の近くにありま



(5) 鉄砲伝来紀功碑

種子島の最南端は門倉岬です。この門倉岬に、太平洋に向かって立つひとときわ大きい碑があります。これが大正10年1月に建てられた、「鉄砲伝来紀功碑」です。

ポルトガル船が、門倉岬に漂着したのは、天文12年(1543)8月25日のことです。この鉄砲伝来の事情をくわしく記したもので、高く評価されているものに、南浦文之(宮崎の人で、島津義弘に招かれて儒学を教えていた禅僧)の「鉄砲記」があります。それには、当時西之村(今の西之地区)の地頭であった西村織部にしむらおりべのじょう丞とポルトガル船にのっていた明国(今の中国)の人五峰ごほうとの筆談によって、この船がポルトガル船であることが分かり、そのことを島主に知らせました。本村に上陸したポルトガル船の一行は、島主の指示を待つことにし、本村に滞在します。地元民の手厚いもてなしを受け、2日間滞在し、その間鉄砲を持って浜山はまのやまで狩をしたと伝えられ



鉄砲伝来記功碑(門倉岬)

ています。初めて鉄砲の音を聞いた西之の人たちは目をまるくして、驚いたことと思います。日本で初めて鉄砲が発射されたところは、西之本村の浜山はまのやまということになります。

8月27日、ポルトガル船は、赤尾木(今の西之表)に廻航され、船の修理を急

ぎながら島主時尙ときたかの接待を受け滞在することになりました。そのとき、島主時尙の目をひいたのは、鉄砲でした。早速二丁を買い入れ、また、刀鍛冶八板金兵衛に鉄砲作りを命じました。翌天文13年、ようやく、鉄砲の製法に成功して国産の鉄砲が種子島に初めて生まれました。



ポルトガル船の漂着地

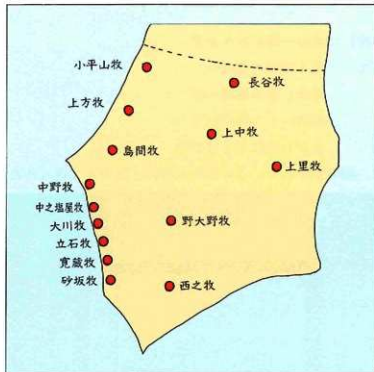


ポルトガル人上陸記念碑

(6) 牧(マキ)の神

牧は、牛や馬の放牧地のこと。種子島では早くから牧場がつくられ、特に種子島6代の島主時充(約650年前の人)は、島民の生活の安定をはかるため、直営の牧を作り牧畜を奨励しました。この直営の牧は、種子島の特産品であった塩の生産に必要な牧を重点に設けました。これを「塩屋牧」といいます。

左の図は、南種子町にあった牧の分布図です。塩屋の



南種子町にあった牧の分布図

多かった西海岸に集中しているのが分かります。

農耕用の牧は、長谷、上中、上里、西之にありました。この牧は、水田の代かき(田の表土を軟らかくして平らにすること)に、馬を使うためのものでした。

西之に、寛蔵牧という地名が残っています。これは、平山寛蔵(西之表の人)の私有牧の跡といわれています。

これらの牧には、牛馬の安全を祈願するために、牧の神を祭っていました。

明治の中ごろ馬耕技術が入り、そのため、山や牧場が農地になり、しだいに牧は消え去り、牧の神を祭るところも少なくなりました。

牧の年中行事に、馬追い、耳きり、馬やきなどありましたが、牧の消滅とともにこの行事も姿を消し、馬やき(2月から3月)の行事が集落ごとに行なわれるだけとなりました。



牧の神

(7) 貫門

「種子島一周の歌（八板宗二作）に次の一節があります

屋久津、梶潟打ち過ぎて 通るは磯の島伝い
稲子泊の貫門の 道来し昔の事問へば
久時公の御代とかや 朝鮮いくさの功にて
許しを受けて建てし門 古びし柱に名をとどむ。

島間小平山集落の稲子泊いなごまりに、網切家があり、この家の入口に、椎の木で造られた「貫門ぬきもん」があります。貫門とは、2本の柱を建て上の方をくり抜きその両穴に木を通した門の事です。

この貫門の由来は、遠く全国を統一した豊臣秀吉が、朝鮮出兵をする慶長の役（1596）にさかのぼります。

種子島16代の島主久時ひさときは、島津義弘に従い朝鮮に渡ることになりました。軍船を自由に操



網切家の貫門

る船頭が必要になり、稲子泊の吉右衛門外数名が選ばれてともに従軍することになりました。種子島勢が朝鮮興善島の附近にさしかかった時、明軍は海峡に網を張り種子島勢の進路を妨げ、味方は苦戦におちいり、多くの死者を出しました。久時は、吉右衛門に「波の平」の刀を与え、「あの網を切って来い」と命じました。吉右衛門は直ちに潜り、網を切り破り、さらに敵の船に近づき、あかぬきの栓を抜いて沈没させ種子島勢を救いました。久時は、その功績をたたえ、吉右衛門に網切の姓と帯刀を認め、島間沿岸の漁業権と貫門を建てることを許しました。

代々この貫門を守り続けてきましたが、言い伝えによりますと、建て替える時には1年に1本づつとり替えることになっているということです。

(8) 種子島製塩初の地

種子島に初めて製塩の技術が伝わったのは、種子島6代の島主時充ときみつの時代とされています。約650年前の頃になります。現在の南種子町立石集落にこのころから伝わった塩釜伝しおかまでんという古文書が残されています。それによると、島主時充の命を受け製

塩に従事した最初の技術者は、貝太郎、貝次郎という鎌倉式の製塩方法を知る兄弟であったといえます。初めに立石浦に釜しおたを築き塩炊きを始めました。その製塩の方法はおよそ次のとおりであったと伝えられています。

釜の構造は、約5.5メートルの内形(円形)に高



製塩発祥の地

さ1.8メートルに築き上げその上に梁を渡して竹の綱代を張り、石灰、(当時は沿岸の海中にある石灰石を焼いて粉にしました。)苦塩を塗り乾かすこと60日~70日、塩を煮る鍋としてこの中に海水を入れ一昼夜煮つめて塩を炊き上げました。1回に2石5斗(約450ℓ)の塩ができたといえます。

下立石には、立石塩屋神社がありますが、この神社に製塩にかかる道具や古文書が収められています。種子島の製塩技術は、牛野塩屋、大川塩屋、中之塩屋、砂坂



塩屋と広められ島内に普及していきました。

塩釜伝

(9) 製糖発祥の地

藩政時代の種子島では、甘蔗の栽培は自由に耕作することはできませんでした。したがって砂糖の製造が始まったのは、栽培の許可がおりた文政8年（1825年）からのことです。

当時の島主久道の夫人で種子島の産業の振興に力を尽くしたといわれる松寿院が、文政10年9月（1827年）製糖の許可を請い、その結果藩主の許可を得て、種子島に製糖場ができることになりました。しかしながら、製糖



さとうすめ（西野中学校）

技術を知る人がいないため時の種子島家老知覧才兵衛は製糖技術者として、大島郡徳之島出身の前窪^{まへくぼ}という人を招き製糖技術の普及に努めさせました。基永では、翌文政11年松原に製糖場ができていますので、南種子町一円に製糖場ができていった



前窪氏の墓（西之本村）



さとうすめ（西野中学校）

と思います。この前窪という人は晩年西之本村で過し、墓も本村にありますので、最初製糖技術が伝わったところは、西之本村であると伝えられています。西野中学校では今でも「砂糖すめ」の伝統を学んでいます。

⑩ おおつかさま 大塚様の石塔

大塚様ゆかりの地は、島間大久保字大久留目です。

この話は、仏教に関係のあることです。種子島に仏教が伝えられたのはいつのことかははっきりしませんが、「日本書紀」（日本最初の歴史書）に次のように書かれています。和銅2年（709年）6月、「前略但し薩摩、多禰两国師及び国師僧等は減せず」とあります。種子島への仏教伝来はこれ以前からあったと考えて



大塚様の石塔

よいと思います。さて、このころの仏教は律宗^{りっしやう}で、種子島の人々の精神的文化を支えてきました。一島律宗を崇拝してきた人々にとって、宗教上の大きな変革の時がきました。文明元年（1469）この時の島主時氏が全島法華宗へ改宗する命令を出しました。時の島間の地頭^{じとう}であった「大塚様」は、改宗することに反対したため、「鐔切り引き」という刑を受け、この世を去ります。

島間の人々は、大塚様の遺体を島間を見下ろす高い山に移し、石塔を立てて祭り、今でも毎年8月13日には、お祭りをしています。そして、この山を大塚山と呼び大切にしています。

⑪ 南種子町への入植

明治以降、種子島が主に集団として入植者を迎えた時期が大きく分けて3回あり



さつまいも植付作業

（昭和26年6月撮影。写真は長谷中川一ニさん提供）

ます。先ず最初は、薩摩郡甑島からの入植です。甑島では明治16年から3年連続台風の被害を受け、漁業だけでは生活の見込みは立たず、県の計画により耕地の豊かな種子島に移住することとなり南種子町もその受け入

れに努力しました。その結果、島間浜久保に8戸、田尾に8戸、牛野に2戸、上中

脱の口に12戸、長木田に9戸、大川に2戸、西之崎原に7戸、上瀬田に2戸、立石に2戸が移住してきました。なかには知らぬ土地と言うことや農業労働のきびしさ、また望郷の思いもつり、再び甌島へ帰る人もいましたが、多くの方はここを永住の地として今日に至っています。

次に、大正13年の桜島の大噴火による移住があります。

第3回目は、第2次世界大戦の終結により、新開拓地として長谷が脚光を浴びることになります。

◎昭和20年以後の長谷開拓

昭和20年12月の第1次農地改革によって542.4ヘクタールが民有地として開放されました。

昭和21年6月長谷地区に入植が開始され、第1次入植としてパラオ島引揚者37世帯が南種子町地区に集団入植、第2次がサイパン、テニアン引揚者15世帯、さらに満州、朝鮮、台湾からの引揚げ戦災者、地元出身者、現地除隊の軍人、開拓増産隊の人々約174世帯が、入植し新しい時代がはじまりました。

昭和22年4月には、長谷小学校が創立され、児童数123人、4学級編成で開校しました。

現在まで長谷開拓45年の歳月が流れました。初め174世帯で始めた長谷開拓の歴史は、国の政策転換等により、昭和50年に開拓組合は解散し、現在はJA南種子に加入し農業の生産に努力しています。入植当時20歳の青年は、現在67歳になりました。世帯の中心は2世の時代となりそれぞれ幸せな生活を過ごしています。

長谷小学校の校門の西側に、「長谷開拓の碑」が建てられていますが、それには苦しかった開拓の歴史が刻み込まれています。長谷開拓に希望を抱き、生き続けてこられた開拓の先駆者の精神は、「長谷開拓の碑」刻まれています。

「長谷開拓の碑」

昭和21年6月、私たちは南洋群島パラオ諸島から引揚げた同志を第一陣にその8月までサイパン、テニアン、その他内外各地から引揚者174世帯と共に着のみ着のままの状態、長谷野の荒野に開拓の鍬をおろしました。以来23年入植当時の苦難の日々は記憶に生々しいものがあります。第1に食糧難開拓の合間を見ては、今日の糧を求めため近所の農家に労力を提供し、ツブブキ、ワラビなどの山菜、澱粉類、石龜などは重要な主食となりました。又海辺に薪を運び塩焼きもしました。第2に住宅難、堀立小屋に茅の屋根、防空壕を住居にした者もありました。衣類などこの次で、ただ生きるための糧を求めための日々でした。苦難の積み重ねは徐々に報

われ、荒野は沃野と変わり、美田となり長谷野にまかれた麦は血と涙と汗を吸い、今、みのりの時を迎えています。それは、我々同志のたゆまぬ努力と何ものにも屈しない開拓精神によるものですが、同時に関係当局、地元民各位のあたたかい指導と援助



長谷開拓記念碑（長谷小学校前）

があったからに外なりません。この時、記念碑の建立が南種子町によって行なわれるに当たりここに長谷開拓の苦難に満ちた歴史を永く世に伝えるため碑文をしたためるものであります。

昭和43年12月吉日

長谷開拓農業組合
南種子町建立

(12) 宇宙センター

●宇宙センターのはじまり

昭和41年、科学技術庁宇宙開発促進本部によって、南種子町竹崎地区に、小型ロケット打ち上げ用の射点や固体ロケット地上燃焼試験を行う竹崎射場（総面積79万㎡）の建設が始まりました。

昭和44年10月に宇宙開発事業団として発足し、翌45年からは、大型ロケット打ち上げ用の射点や液体ロケット地上燃焼試験を行なう大崎射場（総面積760万㎡）の建設が開始されました。

竹崎射場からは、昭和43年以降84機の小型ロケットを打ち上げ、人工衛星打ち上げ用ロケットへ向けての各種技術の習得が行なわれました。

大崎射場からは、昭和49年以降、実用分野へ向けての大型ロケットが打ち上げられました。初期には試験用ロケット2機そしてN-IIロケットで7個の人工衛星が打ち上げられ中・高度及び静止軌道への投入並びに各衛星の追跡管制の技術が習得されました。更に昭和56年からは、N-IIロケットにより気象・通信・放送の実用衛星8個が打ち上げられ、気象情報やテレビの衛星放送などに大活躍しています。

(13) これからの宇宙開発

昭和61年からは、自主技術を中心にしたH-Iロケットを打ち上げ、慣性誘導装置や複数衛星打ち上げの技術を確立しました。また、H-IIロケット打ち上げに向けて各種の試験も行なわれ、その打ち上げへの開発が着々と進められています。



H-Iロケット打ち上げ(平成4年2月)



竹崎射場から打ち上げられた「たけさき1号」(平成3年9月)

宇宙は人類共有の開拓地であるという視点から、世界の多くの国が宇宙の科学研究、宇宙の平和利用をめざして、人類の英知と力を結集し宇宙開発に取り組んでいます。

H-IIロケットは、約2tクラスの衛星を静止軌道に打ち上げる能力をもち、平成5年から6年に種子島宇宙センターから初打ち上げを計画しており、その射場も完成しています。

一方、本格的な宇宙実験の第一歩として、スペースシャトルを利用した第一次材料実験計画を進めており、この計画では日本人搭乗科学技術者が搭乗し、宇宙での材料実験を行なう予定です。また、21世紀へ向けて、米国の宇宙ステーション計画に参加し、平成4年日本人初の宇宙飛行士（毛利衛氏）が誕生しました。将来の人類の平和のための宇宙活動をめざした国際協力、H-IIロケットを利用したHOPPE打ち上げ計画など宇宙センターは着々と整備・拡充がなされ、「宇宙基地の町みなみたね」の名を高めています。



H-IIロケット打ち上げ射場（吉信射場）

第四章 南種子町の宝物

夜空に輝く星、白砂と奇岩、清冽な黒潮の流れ、種子島は今も豊かな自然の中に生きつづけています。

昔から「穀物がいっぱい実る島」……種子島とってきました。その昔種子島の中心は南種子でした。南種子は文化溢れるところです。以下数々の宝物を紹介しましょう。

(1) 鰐口

下中、真所^{まどころ}八幡神社に奉納された宝物、銅製の工芸品ですが、応永33年3月、



鰐口（昭和43年3月県文化財指定）

（1426）今から566年前に、「長谷部徳永」という人が、航路安全を祈願して奉納されたものです。このような「鰐口」は他にありませんので、昭和42年鹿児島県の文化財として指定を受け保存しています。

(2) インギー鶏

これは、「鶏」^{にわとり}の一種で、下中里集落の寺内昭徳さん宅と花峰小学校で飼われています。

「インギー」というのは、南種子の方言で、イギリスのことです。話は、明治27(1894)年4月25日の夜のことで、香港に向かうイギリスの帆船「ドラム・エルタン」号が暴風雨に会い前之浜（下中の海岸）に漂流してきました。前之浜で塩炊きをしていた真所の羽生嘉助さんは急いで集落に帰りホラ貝を吹き、下中の人を集めました。相談の結果、泳ぎのうまい羽生太平外若手3人が泳いで調べることになりましたが、相手はイギリス人、英語を話せる人はいないので、基南小学校の伊地知校長先生にその役を頼み、ようやくイギリスの船であることがわかりました。郡役所に早馬を

走らせると同時に、乗組員29名を救助して才川周右衛門(当時南種子村の村会議員)宅外5軒に收容しあつくもてなしました。

まもなく郡役所(西之表)から通訳が来て、さらにくわしく調べたところ船底を破損していることがわかり修理にあたらせました。そのうちに、イギリスの東洋艦

隊6隻が救助にきて、長崎に曳航しました。「ドラム・エルタン号」には食用の鶏外たくさん動物を飼っており、そのうちの11羽の鶏を真所の人たちにお礼として贈ったと



インギー鶏

いうことでした。下中の人たちはその鶏を大切に育て今日まで絶やさずにきました。当時の心暖まる話しは、今も「インギー鳥」とともに生きつづけています。

(3) 枕状熔岩

場所は、立石海岸です。約10メートル四方の狭い範囲に見られる「枕状熔岩」



枕状熔岩(立石)

は、流動性の大きい玄武岩質マグマが海中に噴出または、流入し、表面だけが冷やされて固まることをくり返してできたもので、俵を積み重ねたような外観をしているのでまたの呼び名を「俵状熔岩」ともいわれています。

この種の熔岩が、対岸である屋久島でも発見されており地理的・地質学的に貴重なものとして保存されています。また一説には地球の地すべり現象によるもので、海洋底拡大といって、1年間に約10センチメートルずつ西へ動いていることが証明されており、この熔岩もその影響を受けたものではないかといわれています。

町では、昭和55年、「天然記念物」として保存保護の指定をしています。

(4) 田代化石

場所は、西之田代から^{ほんむら}本村へくだる道路側にあります。また、東側の谷にも見られます。

化石は、地質時代(約7000万年前)に生息した動植物の遺骸または、その跡が推積岩の中に残されたものであるとされています。

化石を調査することによって、この時代の環境を知ることができますので、「田



田代化石

代化石」は、種子島の成立などを知る上でたいへん貴重なものです。

鹿児島県内でも、化石を見ることのできる地域は少なく、田代のように狭い範囲に数多く見られる地域はめずらしいといわれています。

(5) 埋蔵文化財

釜永松原・島間横峯地区の埋蔵文化財発掘調査を平成4年9月から12月にかけて行ないました。松原遺跡は、農免農道整備事業に伴い実施したもので、9月28日から10月2日(予備調査)、12月14日から25日(本調査)までに実施。横峯遺跡については、農地ほ場整備に伴い、10月26日から11月17日(予備調査・本調査)までの15日間発掘調査を行ない、両遺跡から、縄文式の土器や、奈良平安時代の土器・須恵器などの貴重な遺物が多数出土しました。

特に横峯遺跡では、2万2千年から3万年前の旧石器時代のものとみられる^{レ*}「礫

群」(小石の集積のこと=石を焼いて、その上に魚や肉などをのせて、調理に使った炉跡=) 2基が見つかりました。

この礫群の発見により、3万年前から南種子町にも人が住みつき、生活していた



ことが証明され、種子島では初めて、県内でも最も古い遺跡ではないかと注目されています。

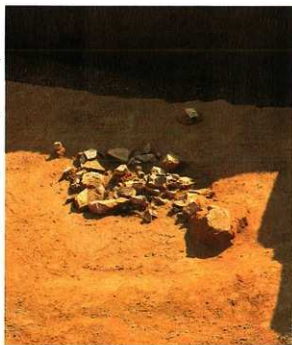
発掘の様子(釜水松原)



縄文時代の石器や土器など約1,600点が出土した(釜水松原)



発掘の様子。眼下には屋久島を望み、絶景の場所である。縄文時代早期の土器・石器類が多数出土した。(島間横峯)



発見された礫群 (島間横峯)

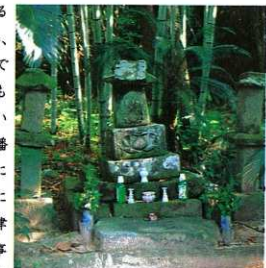
第五章 南種子の人物伝

—— 先人のあしあとを訪ねて ——

(1) 日悦上人

日悦上人は、種子島清時の第五子にあたる人で、19歳の時律宗の僧となり喜道と呼ばれ、赤尾木（今の西之表）にある大会寺に住っていました。8代島主清時は、6人の子供をもうけましたが、第3子の幡時が第9代を継いでいますので、喜道はその弟になります。幡時に後継ぎがなく、宮崎から時氏を後継ぎに迎えます。このころの種子島は、全島律宗に帰依していましたが、時氏の時代に全島が律宗から法華宗へ改宗するという大きな出来事が起こりました。しかし、喜道は律宗を改めることをこぼみ、ついに中之村（今の上中）に隠居しました。

河内にきた喜道は、信光寺というお寺を建て、河内の人たちのために水田を開いたり、用水路を造ったり、郡川のはんらんを防ぐために川岸に竹を植えたり、また、孟宗竹を植え村人に竹細工を指導したりしました。今でも地名に「細工が守都」や「隠田」という所が残っています。



日悦上人の墓（上中河内）

喜道は、数々の善行を残して延徳2年（1490）9月11日にこの世を去りました。喜道は死後、法華宗に改宗されたとして、自悦坊日悦という法名を受け、以後「日悦上人」と呼ばれるようになりました。現在でも日悦上人が着ていたといわれる法衣が、河野長平氏宅に残されています。上中の人々は、上人の遺徳をしのび大正11年1月、顕彰碑を建立しました。



日悦上人の法衣（河野長平氏所蔵）

(2) 松寿院 (種子島隣子)

松寿院は島津齊宣 (27代) の二女として寛政9年 (1797年) に生まれ、名を於隣おちかといいました。そして、わずか三か月で種子島23代の島主になる久道の妻として種子島家の人となりました。

この松寿院が、南種子町の産業発展のために、大きな功績を残しました。

平山から熊野へ通ずる途中、左手にめひるぎの自生する大湿地帯があり、大浦川が流れています。ここが安政より文久年間にかけて、松寿院の偉業のひとつである大塩田の名残りを留めているところです。以前は満潮時になると人馬は通れず、潮入で田畑の作物は枯れてしまうという状況でした。

種子島に製塩が始まったのは、室町時代のはじめのころ、貝太郎、貝次郎の兄弟による製塩が西海せいかいの立石で始められてからですが製塩の技術は改良されず、塩水を



大浦塩田の跡

そのまま炊くというやり方で、生産はあがらず島外からの塩を買い入れていました。松寿院は、これを解決しようと思いました。安政3年の冬、市来いちきの平川という人呼び大浦をみせたところ、塩田には好い場所であると保証されたので塩田づくりを決意しました。

松寿院の最初の考えは、大浦川の河口をせき止め、熊野あまけの阿獄川へ振り通し合流させれば潮入の防止になり、塩田つくりと水田の潮入防止の一石二鳥の効果を考えましたが、海の状況から難工事であるのと、経費が予想以上にかかるということで計画を変更し、大浦川の川幅を広げ曲りくねった川を直し、新しい土堤を約200メートル作り、上は道路になりました。その結果、水田への潮入は防がれ、りっぱな水田

となりました。

目的の塩田はこれと並行して行なわれましたが、思うようにはかどらず、時は過ぎ、安政6年、出水から技術者の庄八・庄次郎の二人を招き、製塩にあたらせてやっど成功しました。

記録によると塩田は内と外にあり、内塩田だけで約3.8ヘクタール、自給はもちろん島外（屋久島）まで売り出すようになりました。

庄八、庄次郎は平山にそのまま住み着き、子孫である麻生家はいまも平山仲之町にあります。

その後大浦塩田は、明治27年に鳥取の人の手に渡り今のトンネルを掘り通しましたが資金が続かず鹿児島の人に渡り、ついで、昭和3年地元平山の人22人が3千3百円で買収し近代的な塩田に姿をかえました。昭和27年頃で採算が合わなくなり塩田は中止されました。

(3) 菊池竹庵

竹庵は、文政12年(1929)、平山瑞堯ずいぎょうに生まれました。5歳の時西之表の慈遠寺の小僧となりましたが、9歳の時に鹿児島市下荒田の正建寺で10年間の修業を積み多くの詩文を読み、書は蚊島白鶴に習い、抜群の成績であったといひます。



菊池竹庵の墓（左）と記念碑（右）

弘化5年(1848)19歳の時、大志を抱き僧をやめました。大阪で医学を学びましたが再び仏門に入り、伊賀の法華寺の住職となりました。時は幕末動乱の世でした。時代の流れの中で東奔西走、江戸（今の東京）で武芸に励み、柔術は渋川流、薙刀は旅月風流を学びともに免許の資格を得ました。

当時の幕末は、激動の時代でした。24歳の時には、ペリーの浦賀来航、30歳の時は安政の大獄、その翌年は桜田門外の変、33歳の時は坂下門外の変、寺内屋騒動、生麦事件と相つぎ、35歳の時は蛤御門の変、長州征伐、37歳の時は薩長連合、その翌年は、大政奉還、そして、王政復古の号令が下りました。彼は、官軍の先頭に立った陸軍軍に入り、敵状偵察の任にあたり数々の動きをしました。

慶応4年(1868)4月6日、いまの千葉市の近く、五井駅で幕府軍に発見され最期をとげました。この年の9月明治と改元され新しい時代が訪れました。

竹庵の遺体は、東京大円寺に埋葬されましたが、郷里平山でも竹庵の碑を平山神社の境内に建立しています。勤王の志士菊池竹庵という名のいわれは、南北朝時代の菊池武光(九州)にあやかっただものとされています。

(4) ^{すなまかまごぼ ともん}砂坂孫左衛門

孫左衛門は、文政9(1826)年5月6日、西之村砂坂に生まれました。

門倉岬から島間岬に至る西海岸は、地質学でいう第三紀の熊毛層の岩盤が露出している断崖絶壁の多い海岸が続いています。特に砂坂から立石に通ずる高瀬原たかせのはらは約1キロメートル近くも道はなく、干潮の時磯伝いに通るより外は山手を三倍近くも遠く歩かなければならない不便なところでした。

孫左衛門は生まれながらにして温厚篤実な人がらでした。また、信念の強い人でよく家業に励み不自由のない生活でしたが、子供運に恵まれず次々に子供は病死し、最後に残った娘も病氣



砂坂孫左衛門翁の碑

になり、途方にくれる毎日でした。孫左衛門は神仏に祈りながら、世のためになることをすれば娘の一命も助かるにちがいないと心に決め、高瀬原の道づくりを決意しこの仕事に打ち込むのでした。時に明治5年(1872)、46歳の時でした。山嶽一つで堅い岩山にいとむ姿は「青の洞門」の禪海和尚を見るようでした。神仏に祈り、娘の病氣快復を願い、鋤を振り上げる毎日でした。作業は思うように進みません。木を切



高瀬原全景

って枯らし、岩盤に積み重ねて岩をやき、海水を注いでき裂を作り、鍬で砕きながら粘り強くがんばりました。

しかし娘の病気はよくなりず遂にこの世を去りました。わが身の悲運を嘆く毎日でしたが、気をとり直し娘の成仏を祈りながら、再び高瀬原に立つ孫左衛門の姿を見る日が続きます。やがて新道の目が見えてきました。村人たちの応援もこの時から始まり、ようやく明治10年8月、念願の道は開通(1.5キロメートル)することになりました。

村役場も、この孫左衛門の功績に対し当時の戸長が田4畝を贈り、また、明治23年2月4日、県知事より賞金拾円を受けました。村人からの感謝と尊敬を受けながら、大正元年(1913)87歳の高齢をもって帰らぬ人となりました。いま、高瀬原にそびえたつ孫左衛門を讃える石碑は、浜田藤太郎氏外西之の有志によって建てられたものです。

(5) うしのとよじよ 牛野豊女

豊女は、島間の人、善兵衛の二女として天保14年(1843)12月3日に生まれました。18歳の時牛野喜作の嫁となり、夫婦仲よく家業に励み、長女まつ、長男周右衛門、次男松次郎と三人の子宝にも恵まれました。この松次郎が1年余り過ぎたころでした。豊女は、いつものように塩売りのため、米どころの釜永へ出かけ塩売りしていました。その時激しい泣き声を耳にしました。あまりに激しい泣き声に豊女はその家の戸をたたきました。父孝七は病いの床に伏し、また、母親は産後の肥立が

悪く母乳も出ない上に、貧しさのため乳母を頼むこともできず、毎日乳もらいに明け暮れている有様でした。このことを聞いた豊女は、さっそく自分の乳を与えて飲ませました。

自分の家に帰った豊女は、夫の喜作に、引き取って自分で育てたいと相談しましたが、自分にも子供が3人、決断が出来ません。それから3日経ちました。思いがけなく基永から病身をおして来た孝七の願いは、子供の養育のことでした。事情を知っている豊女夫婦は、その頼みを快く引き受け、翌日子供の着物も縫い上げ、基永へ子供を受け取りに行きました。家に連れ帰った豊女は、その子を我が子同様大事に育て、慶応元年孝七のもとに帰しました。その行為に対して県令大山剛良は、明治9年4月17日、賞金貳円五拾銭と賞詞を下されました。

(6) 日高亮助

日高亮助は、嘉永4年1月15日、西之下西目に生まれました。

明治の初め、島間戸長役場の民選戸長となり、その後、「町村制」施行と同時に南種子村の初代村長に就任し、その基礎固めをした人です。

明治維新の改革によって、南種子の行政機構も、数回にわたって改正が行なわれました。明治10年の改正で官選戸長が廃止され、新たに戸長選挙法が制定されました。この時の島間村戸長役場（島間・西之・坂井）の初代の民選戸長に選ばれたのが、日高亮助でした。温厚篤実な人で、村民の融和に務め、また、産業の振興や道路の建設に力を尽くしました。



日高亮助翁記念碑（西之研修センター前）

明治22年（1889）4月、全国一斉に実施された「町村制」によって、島間、西之、中之上、中之下、基永、平山を統合して「南種子村」が生まれました。その初代村長に就任し、新しい村制の基礎を築き明治25年7月まで任期を努めました。再び村長に選ばれたのが明治32年のことです。このころの南種子村役場は基永にありまし

たので、中央の上中に移転しようとする動きと、それに反対する動きと二派に分かれ激しい争いがあり、その解決のために日夜努力を重ねながら、明治40年3月まで村政にあたってきました。しかし、役場移転問題は困難を極め、解決されたのは、大正12年5月です。

亮助は、明治新制度の動乱期に、民選戸長を2年、村長を通算11年あまりにわたり、村づくりにその生涯をかけた功労者として高く評価されています。



鮫島二男丸翁胸像

(7) 鮫島二男丸

鮫島二男丸は、明治22年12月5日、島間上方に生まれました。

熊毛郡立農林学校（今の種子島実業高等学校）を卒業し、小学校の教員・兵役などを経て大正3年、南種子村役場に就職し、専ら農業・林業の技術改善や品種改良にあたりました。特に、昭和12年から始められた水稲の早期栽培の普及指導に駆け回り、その結果、昭和16年には全村に普及され、メイ虫や台風の被害も少なくなり、南種子の米づくりに、大きく貢献し

ました。また、昭和30年4月、南種子村長に就任し、昭和38年3月南種子町長を退任するまでの8年間は、町制の施行、農業構造改善事業の推進、ポンカン・タンカンなどの果樹栽培の普及、緑茶・紅茶の導入また、町有林の造成などに積極的に取り組み町勢発展の基礎作りをしました。

南種子町では、その功績をたたえ、町役場前に胸像を建立し、また、「名誉町民条例」によって、名誉町民の称号を贈りました。

昭和52年12月、89歳でこの世を去りましたので南種子町は、『町民葬』をもってその生涯の功労に報いました。

第六章 南種子の民俗芸能

“四季を彩る祭りと行事”

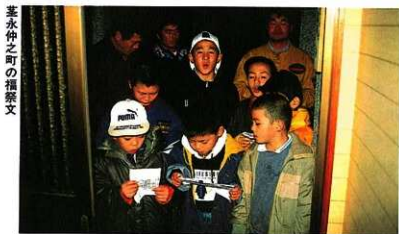
—— 豊かな文化に出会う町 ——

南種子町は、民族芸能の宝庫といわれています。優れた自然と人情の豊かさは、数々の芸能を育てる土台となってきました。ここに挙げる年中行事や、歌・踊りは、その中の一部です。

(1) 福祭文^{くまいもん}

祝福芸の一種です。これは、神や仏にお祈りして、今年もよい年でありますようにと言う願いをこめて、正月7日の夜、各集落ごと各家の門松の前で歌うものです。

町内の各集落には、それぞれ独得の文句があり同じではなく、漁業に従事する集落には、大漁を祈願する文句もあります。



葦永仲之町の福祭文

歌 詞

- ヒョー①くさいもんじゃ候よ
②何時よりも今年は
③門の松が栄えた
④栄えたこそもどうりよ
⑤蓬来山ほうらいさんの松なれば栄えたもどうりよ
⑥これの殿の御門に
⑦鶴と亀が舞い来た
⑧舞い来たこそも道理よ
⑨四方の隅々に
⑩泉酒がたたえた
⑪たたえたこそもどうりよ
⑫白金の曲桶に黄金の茶び杓で
汲みたたえたこそも道理よ
⑬東三条四条には白金の山を築き
⑭西三条四条には黄金の森をつく
⑮銭花かつぼうで黄金花が咲けきた
⑯咲けきたこそも道理よ
⑰大黒他の神、福の神、福喜万福みようがに叶せ給えよ
⑱町のお祝いお込めやれ。

(2) 蚤舞かごまわ (祝福芸)

小正月（1月14・15日）の夜、遠くから聞こえる鐘と太鼓の響き、白起し、福祭文、鍬入れ祝いと正月一連の農耕を祝う余祝の行事も、蚤舞で舞納めます。蚤舞は少年たちは参加せず青年男女が各戸を訪れ、女装の男子がこの家の豊作を願い優雅に舞い上げます。昔は種子島全島で行われていましたが、今は南種子町だけになりました。

平山の蚤舞は、鹿児島県指定の文化



蚤舞い（上中本町）

財です。

〔歌詞〕

「お祝い申し上げ申
そう」
これから申すヨ、門
から申すよ
この家はお家は裕福
舞いの家と見かけ申
すよ
ましてこの家祝うて
おじやるろうからお
祝い申すよ



家の外では太鼓やカネを打ち鳴らし蚤舞いの唄を歌う（上中本町）

九十九階の蚤の宮城を廻しますさきは
綾をはえ錦をひろげ、ヤーランラとどくどうませて
これより東の朝ひら峠のケンケン鳥のメンドリの右のおぼり羽根、左の風切り、
おつとり合せて
一羽根がいですくえば千枚すくう、
二羽根がいですくえば二千枚すくう
三千枚の蚤種をよせよ集めよ
アリ児になるときや、アイライライと申すよ
ツブレになるときや、ツルツルと申すよ
フシ児になるときや、ハジの舞を召す
長雨になるときや、雨桑もきらわず露桑もきらわず
赤まゆ、白まゆかがせ給うれ そのまゆの固さは
天河原の石より固うござる どの駒か春駒の勇む如くに
夢に見てさえものうきものよ
母女さまかよ娘女さまかよ 町のお祝いおとりやれ。

(3) 座敷舞（狂言）

基永宝満神社に伝わる明治10年頃に記録した文書によると、お田植祭のあとの田植上りの余興として鳥刺舞を踊ったとあります。舞の特徴は、大勢の囃につられて1人の踊り手が、所作もおかしくその囃のとおり姿に化けて踊るといふ1種の即

興的な芸能です。芸能分類上は狂言系に属しています。(県芸能分類案平成3年)

古くは、鳥刺舞を初めとして12通りの舞がありました。

平山の座敷舞は、県指定の文化財ですが、現在では島間でも復活されています。

ここでは、「鳥刺舞」を紹介します。

(囃) 鳥刺舞はみさいな、鳥刺舞はみさいな (鳥刺舞見たいなあ)

(踊手口上)

今日は正月元旦で、2日の日なんだ鳥刺しなんて出かけうよ。

(囃) 鳥刺舞はみさいな 鳥刺舞はみさいな

(踊手口上)

前の山をさるけば、ハトがククツクウ、ククツクウとぬっからかえすところに、この鳥刺の耳にじっと入って、さそうまいと思うておいども、こどもどめくな、先にもちをじっとつけてこの向きにかまえた ジィッと刺しておとってこまか鳥のことなれば、左のタモトにバタバタ。

(囃) 鳥刺舞はみさいな 鳥刺舞はみさいな、

(踊手口上)

3日の日に休んで、4日の日なんだ 鳥刺しなんて行こうよ上の野ッ原をさるけば ケンケン鳥が1羽、ケンケンとぬっからかえすところに、この鳥刺の耳に入って さそうまいと思うておいども、こどもどめくな、やはぎばねもくるんどむくろう羽もくるんど さそうまいと思うてこの向きにかまえた、 ジィッと刺しておとってふどか鳥のことなれば 腰のなわにバタバタ。



「鳥刺舞」

(4) 西目出し (祝福芸)

祝賀の踊りとして、よく新築落成の時に踊るものです。踊手は女子、衣裳は、裾模様などの晴着で、数名が2列か3列を縦長に並び踊り場をつくります。

初めにある歌詞のように、鹿児島島の西目(枕崎、坊津)山川との交易の様子などの歌に合せて、ゆっくりとした手踊りの非常に美しい踊りです。今では、平山地区の人たちによつて踊られています。

○ヨーイヨーイ参ろう
かなーアアア、ヨーイ
ヨーイ踊りや参ろうかな
ー

サアアイエー この
まことにナーアアア
若松様よ、枝も栄える葉
も茂る

ヘイラー ハイラー
踊りはハイラーハイラー
サアアイエーエー



西目出し

- 西目出しかよ、山川だしか、沖の小島に帆が見える。
- 鹿の巻筆たが読みそめて、今は恋路の文をかく
- 13鐘の春姫は鹿を殺せしその罪故に今は深で鐘つきしおる。

(5) 宝満神社「赤米」お田植祭り

「日本書紀」天武天皇10年(7世紀)の記録に、「都を去ること5千余里、筑紫の南海中にあり、稗稻常に豊かにして1植すれば両収せられる」とあります。種子島では、早くから稲が栽培されていましたが、基永宝満神社に伝わる「赤米」は御神米として2千年の歴史をもつといわれます。

宝満神社は、種子島の南端、基永松原にあります。一の鳥居をくぐり、参道を約200メートルほど入ると周囲1,204メートルの神池があり、そのほりに「宝満神社」があります。毎年4月初めに『赤米お田植祭』と旧暦9月9日には基永氏子総出の奉納踊(太鼓踊など)があり、種子島では有名な神社のひとつです。

「お田植祭」について、京都大学の渡部忠世教授（作物学）の研究によれば、「お田植祭」に植えられる稲は、ジャポニカが渡来したとされる縄文晩期以前のもので、米の原種であると、昭和61年3月15日朝日新聞（大阪版）に発表されました。「赤米」が植えられる神田は、神社から約300m北にある1.8アールの御畦みせといわれる田に植えられます。

「宝満宮記」よると種播祭（2月4日）及び、2月彼岸に行われる潮祭は最も重要な祭りであるとされています。



宝満神社

さて、お田植祭の日のことについて、「宝満神社祭典の記」に次のように記録されています。

「村役人ノ撰定シタル日（御田植日）ニハ老若男女総出ニテ御苗田ニ集リ、満田ノポリヲ立テ苗取り拍子と称スル拍子をツケテ苗を取り、御神田ニ至リ田植ヲナス。

御神田ニオイテモ満田ノポリヲ立テ特ニ賑々シク拍子ヲツケルナリ。最後ニ「御畦ニ御稲（赤米）ヲ作ルナリ。一部人知レズ植稲アリ、往古神様ノオ作りナルモノト言ウ。若キ婦人入ル事ヲ得ズ。



宝満の池

御田植中ニ少壮ノ男子不意ニ若キ女子ヲ抱キテ御神田ニ入レ四方ヨリ苗ヲナゲ掛ケテ一度ニ「ドット」笑イ神様ノ余興ニ供スルノ例アリ。又、御畦ヲ植ユルニ至リ「社人」ノ妻女「ノボリ」ヲ被リ「ノボリ」ヲ担ギ拍子ヲツケテ種ノ踊リヲナシテ神様ノ余興ニ供スル。各ツケテ「ユスリ」ト言ウ。とあります。

先づ御苗取り祭の後に「お田の森」(祭典の記には、御分堂所とあります)でお田植祭が行なわれます。お田植祭はお田ノ森の頂上にある榎の木の根元に祭壇を設け、



お田の森



お田植え



赤米収穫

赤米の苗が供えられ、祭はこの神聖な赤米の苗を氏子がいただくことから始まります。そして「オセマチ」という神田に田植をするその時「田植歌」が太鼓の調子に合せて歌われます。

若い子よ、若い子、髪をなずる若い子。以下28節に及ぶ田植歌です。

この時、「オセマチには一部人知レズ植稲アリ」とありますが、前夜のうちに「社人」が1人でひそかに植えるというように伝えられています。オセマチ(赤米)、御田(白米)の田植が終わると「舟田フナタ」と呼ばれる田で社人夫妻の「お田植舞」が上演され

ます。この田植舞を「ユスリ」といいますが、苗を手に持ち御田植拍子に合せて足で田を平らにしながら苗を植えるしぐさをします。

そのあと「お知」と呼ぶ舟田に接したはたけで「直会」の儀式があります。村役人が一座になり、甘酒、煮シメ、御神酒をいただきながら、「メデタ節」（種子島の



赤米の脱こく



赤米の玄米

祝歌)そして、旧暦9月9日の豊年踊の一節である「寺踊り」(これは下之町の大踊りの最初の歌です)、が歌われ豊作祈願をして「お田植祭」は終わります。

(6) 下中八幡神社お田植祭

下中八幡神社は、南種子町下中真所まどころにあり、南種子一周道路上に鳥居がみえます。前方約100メートルのところにも古墳と見まちがうような丸い小高い山がありますが、そこを土地の人は「森山もりやま」と呼んでいる聖地です。この神社は、種子島初代藩主信基が、鶴岡八幡宮と武蔵国児五郡二宮村の天照大神宮を勧請し、三代信真がそれをこの地に祭ったといわれ、はじめは「真所八幡宮まどころ」と呼ばれていました。種子島島主及び下中の人たちの厚い信仰を受け今日に至っています。宝物として、応永33年(1426)長谷部徳永が奉納した「鰯口」があり、県の文化財として指定を受けています。

4月初めにお田植があります。隣の茎永宝満神社は赤米ですが、この神社は白米の稲を植えます。

神事は、神社の拝殿で行われ、神官の手でお苗が「お田」まで運ばれます。お田は、さきへ上げた「森山」の東側、神社より浜ん山に通ずる道路と森山との間にあり、ここで神官より「社人しにん爺」に手渡されます。

御神田は、しめ縄によって清められ、一隅に社人の手によって、前夜、浜ん山を通り、海水で清められた竹柴の「シエーシエー」が供えられます。この「シエー」の前に苗を供え豊作を祈ったあと、ひともとみもと一株三株植えます。この時の社人の服装は、和服(着物)に帯、しめ縄でタスキをかけ、着物の裾は後ろで帯に通し、タオルを腰にはさみま

す。

社人の儀式が終ると氏子一同の手で御神田に田植えが行なわれます。御田植えが終るまで社人は、「ガマオイジョウ」の姿になり、スゲ笠をかぶり、太鼓を小脇に田植歌を歌いながら神田の中を歩きます。その後森山の一隅で「直会」がありお田植え祭の一切が終わります。



森山全景



下中八幡神社



社人の祭り（折り）



お田植え

(7) 西之本国寺盆踊り (風流)

風流ということばは、本来、みやびやかと言い、はなやかな行列や踊りで、疾病や災いなどをもたらす悪霊を慰めて送り出そうとするものです。

南種子では、太鼓踊り、盆踊りなどの芸能があり、それぞれに特色があります。

盆踊りは、種子島、屋久島、三島村などでいまでも傳承されていますが、南種子では、旧7月16日お盆の精霊送りのあと、それぞれのお寺で踊ることになっています。今では、お盆が新暦の8月になっていますので、8月16日になりまはすが、西之本国寺、島間本妙寺、上中信光寺の盆踊りが有名です。ここでは、西之本国寺

の盆踊りについて紹介することになります。

「西之本国寺」は、西之地区の中央にある平野にあります。平野を中心にして「東組」と「西組」の二組に分かれ、1年交替で踊ります。東組は、田代、本村、平野、上瀬田、野大之、西組は、下西目、前ノ原、木原、小田、野尻、砂坂、官蔵牧の各集落で構成されています。由来は古く、いつ頃から踊れるようになったかははっきりしません。しかし、種子島全島が法華宗に改宗した文明元年(1469年)に



西之本国寺盆踊り

は、本国寺の前身である本因寺(本村)が種子島家譜に出てきますので、この頃か、それより前から盆踊りがあったものと推測されます。

踊りは、男子だけで写真のように一列円形、浴衣、(昔は踊り着として麻で織った着物でした。)草履、顔に覆面(カンモク)をし、手に扇子をもちます。それに、大太鼓1人、鉦1人、小太鼓1人、笛1人の構成です。歌は、東組が、「ツンタン拍子」と「きのぎの」。西組は、「たけなが」と「きのぎの」の組み合わせで、静かな踊りです。歌詞は省略します。

南種子町では、無形文化財に指定し、保存につとめています。

(8) 9月踊り (願成就)^{がんじょうじゅ}

芸能分類上は、「風流系」に属します。種子島は、民俗芸能の宝庫といわれています。そのうち最も古く興味深いものとして踊りつがれてきたのが、毎年旧暦9月に町内各地のお寺や神社に、奉納される「9月踊り」です。

「9月踊り」は、普通、大踊り、中踊り、小踊りに分けられています。大踊りは、奉納踊りのうち最高の踊りとされ、各踊り集団（各集落、あるいは2から3の集落



平山仲之町「大踊り」（ふるさと祭り）



下中真所の「ヤートセイ」（下中八幡神社）

単位) ごとに独特のがあります。

大踊りは、大太鼓、^か鉦、^い小太鼓の三つの楽器を使い、歌いながら踊ります。大太鼓はかけ打ちと言って、両肩から前にかけて、2本のバチで太鼓をたたきます。これを「両バア」打ちと言ひ、衣装は花がら模様のジュバンともも引、足袋、鉢巻きの軽装で、^い小太鼓と^か鉦を打つ人は、花笠をかぶり袷袋がけ(片ガケと両ガケ)、足袋と草履をはきます。

また、大踊りのことを、歌詞から採って、安城踊りを、国土安穩(西之だけ)北の庄、東山、月日かけ、武蔵野など呼び、さんご踊りを、比翼運理、とたか千代女、佐多岬、千年古松、しんごなど呼んでいます。踊りは、本踊りとくずしに分かれ、本踊りは静かに、くずしは、激しい振りで、勇壮華麗な踊りです。

風流は、室町時代に京都を中心に流行した芸能といわれていますので、種子島に入ってきたのは、それ以後、薩摩との関係もてきますので古くて450年前からと推測され、その他の風流系と共に流行したものと思われま。

この外に「げんだら踊り」が平山西之町に伝えられています。通称「住吉げんだら」と呼ばれ、西之表の住吉が踊り元といわれ、中種子の町山崎と3か所だけで、中踊り系統の「山口踊り」と区別されているようです。はなやかさでは、一品とい

われています。

^{なかおど}中踊りは、踊りの規模(大太鼓の数、踊子の人数など)や内容などから中踊りといひま

す。「山口踊り」も、大踊りと同じで各集落ごとにありましたが、数十年のうちに途絶えた所もあります。葦永では、



葦永仲之町の山口踊り(宝満神社)

仲之町、下之町が有名で、隔年ごとに宝満神社に奉納されています。

普通、大太鼓は4人、^か鉦、^い小太鼓をはさんで2人づつに分かれ、片バア打ちです。服装は、大踊りと共通しています。この踊りの特徴は、女の踊り子が入ることで、大太鼓、^か鉦、入鼓がー列円陣、その外側に女の踊り子が一列円陣になります。歌詞のはじめに「長者どん」という文句がありますので、普通「長者どん」とも呼ばれ

ています。室町時代に栄えた自由都市堺を中心に流行した風流系と思われ、種子島家第12代の島主忠時（1468年～1536年）の時代に種子島に入り、その後全島に普及されたものと推測されます。



上中上之平のベンケイ踊り

小踊りは、手踊り系統が多く、ヤートセー

といわれる口説くどきで、伝七口説、おくめ口説、八兵衛口説、セイザール口説など多くあります。それに、ベンケイ踊り、ナギナタ踊り、ひょうたん踊り、ゲンゴバア、棒踊りなどが各集落で伝承されています。また、島間仲之町には、「カジョウガネ」という琉球踊りがあります。また平山広田に伝わる「チクテン」は、琉球、奄美大島の8月踊りの系統を引くと思われる芸能です。

(9) 南種子の民謡

「民謡は、その土地の人々の内面の情感を歌いあげて、初めて優れた民謡となる。」これは平山在住の元小学校校長向井二生氏の言葉です。民謡に限らず郷土芸能のすべてが、外来の芸能文化に押されて、歌える人が少なくなったり原型がくずれたりして危機に陥ち入りつつあります。しかし、各地区や各集落には、民謡の伝承者として優れた人たちがいますので、今のうちにふるさとの尊い文化遺産を長く伝承していくことが大切だという精神的風土を作り上げていく必要があります。最近、小中学校の文化祭などで、民謡や芸能についての、調査・研究発表がなされているようですので、さらに、大きな活動として発展していくことが望めます。

① 草切り節

草切り節は、種子島の最も代表的な民謡といわれています。その歌の数は、3千とも7千ともいわれ、その地区で即興的に歌われ、定着したものが数多くあります。その代表的な秀歌の一つ

行こや、行こ行こ草切り行こや、絞八島の 左右。

南種子は、草切り節の宝庫といわれています。有名な所は平山です。平山には、

昔からたくさんの歌い手がありました。昭和40年（1965）ごろ、有志の人たちが集まり、平山民謡保存会を作り、歌の練習や芸能の伝承に精力的に活動をしてきました。その代表的な人に、長田仙兵、向井長助、向井嘉助、山田休蔵、山田重三、（以上は故人）、長田實、向井末義、向井二生がいます。

② なあなあ節

③ こうらい節

この歌は、むずかしい旋律ですので、歌える人は、町内でも数少なくなりました。題名は、囃子からきたという説があり、歌詞は、草切り節（7・7・5調）で歌います。

④ 樟脳節

種子島では、江戸時代から明治・大正・昭和のはじめ頃まで樟脳燻蒸きが盛んに行われていました。手斧で樟脳の木を削り、それを鍋の中に入れて蒸し、樟脳を製造していました。樟脳節は、手斧で木端をきぎむ時の歌です。

○樟脳じゃ樟脳じゃと下司様仰やるな

樟脳は、コライコライコライ、天下衆の意気で焚く

シャンと切れシャンと切れ、木端は前さな嫁女は山さな、抱っ込め抱っ込め。

○樟脳を焚かねば 諸税がたたぬ 明日は処分じゃと ふれが出た。

⑤ ようかい

種子島独特の子守歌といわれています。

ようかい ようかい ようかいよ よおこの子が寝たならば

息をほっしと しょうものを ようかい ようかい ようかいよ（以下3番まで）

⑥ こっちこい

おっかんよう おもわんかよう おらねた間にも 波の引く間も

わすりゃせんど こっちこい。（以下6番まで）

⑦ めでた節

種子島の祝儀歌は、結婚式、長寿祝、新築祝、舟祝、祝言（子どもが生まれた祝い）などの祝行事の中で歌われるもので、厳粛かつ最大のイベントが「めでた節」です。

めでた節の歌詞は、町内ほとんど同じですが、長寿の祝や、祝言の時は三番目を「親は百まで子は九十九まで、孫に白髪の生えるまで」と歌います。

1.めでた、めでたの、若松さまよ 技も栄える葉も茂る

2. なおも めでたの 思うことかなうて、末は、鶴亀五葉の松

3. 峰の小松にひな鶴が 谷の巖に亀舞い遊ぶ。

この歌を唱えるときは、酒盛りをやめ、全員正座します。歌い上げをする人を大将と呼び、事前に依頼しておきます。司会者がこの大将を紹介し、協力と力強い斉唱をお願いします。

初めに大将が、ソロで、「めでた」と歌い、次の旋律から斉唱となり以下2番、3番も同様に歌います。めでた節のあと、もうひとつの祝歌で「ゆくいとし」が歌われていましたが、歌い手が少なくなり、今ではほとんど歌われなくなりました。歌詞は次のとおりです。

⑧ ゆくいとし

○めでた めでたの 若松さまよ 技も栄える葉も茂る

○とどけ とどけよ 末までとどけ 末もはじめも 花のように。

(10) 新しい祭り

南種子町の新しい祭りに、ロケット祭り・ふるさと祭りがあります。今では、町の大きなイベントとして、年々盛んに行われるようになりました。

① ロケット祭り



みこし連

ロケット祭りは、昭和54年から実施され、平成4年で14回目を迎えました。毎年お盆明けの8月16日・17日の2日間、上中を中心に実施される夏祭りです。

主なプログラムは次のとおりです。

16日の前夜祭は、本町通りに舞台を設け、午後6時から勇壮なロケット太鼓の打ち分けにはじまり、子供たちの舞踊、地区公民館ご

との郷土芸能の数々、青年団の演芸があり、最後は、ロケット太鼓による打ち納めで締めくくります。また、本町通りは、午後6時から9時まで歩行者天国となり、

両側には夜店が立ち並び見物や、買物客でたいへんにぎやかです。

明けて2日目、主会場を前之峰陸上競技場に設け、午前9時30分からロケット祭りの式典神事、10時から上中市街地パレード、町長さんを先頭に、幼稚園・保育所の園児たちのかわいいみこし、各地区ごとの子供会のみこし、商工会の山車、そして各職場や団体による



婦人による踊り連

踊り連の行列が延々と続き、午後2時過ぎに終わります。

夜のイベントは、午後6時40分から始まり、前之峰特設舞台で町民総出の中、ロケット太鼓に続き、日本舞踊、カラオケ大会、プロによる歌謡ショーなど多彩な出し物も終わるころ、祭りのハイライトである花火大会です。約700発に及ぶ、大小、色とりどりの花火が、南種子の夜空をこがします。そのたびに、観客の拍手と歓声は最高調に達します。その豪華さと迫力は種子島一番といわれています。



ふるさと祭り展示会場

② ふるさと祭り

「ふるさと祭り」と銘うったのは、昭和63年からです。これまでは、自治振興大会・農林漁業祭・文化祭と別々に行われていたものを一つにまとめ、「町政の発展と明るく豊かな郷土をつくる町民のつどい」をメインテーマに掲げ、内容も年々充実してきました。期日は、11月3日「文化の日」を選んで毎年行われます。

平成4年度の内容を紹介しますと、「郷土の自然と歴史及び伝統を再認識し、町民の郷土愛と連帯意識の高揚をはかり、産業・文化の振興により、町勢の発展を期する。」という趣旨のもとに、町内の各行政機関、農業、林業、漁業、商工業、公民館、文化協会が主催者となり、傘下の各種団体の協力による町をあげての最大のイベントです。

会場は次のとおりで、それぞれ盛大に行われます。

- 福祉センター ○式典 町民表彰など
- 健康相談
- 舞台発表
- 農業者トレーニングセンター ○農業経済の展示
- 生活改善紹介
- 絵画・書道・文学
 学校紹介・水墨画展示
- 写真・工芸品など
 の展示
- 前の峰陸上競技場 ○農林水産物の即売
- 郷土芸能発表

平成4年の郷土芸能発表では、各地区公民館から出し物一点ずつ、平山仲之町の「さんご踊り」、上中上之平の「ペンケイ踊り」、島間田尾の「ナギナタ踊り」、西之下西目の「源^{げん}吾^ご婆」、基永下之町の「ひょうたん踊り」、下中郡原・夏田の「ひょうたん踊り」、長谷地区の婦人による「琉球踊り」、大川小学校児童の創作ダンスが発表され、いづれも観衆の喝さいを浴びました。

この「ふるさと祭り」は、産業の飛躍的発展と、自立自興をめざす地域の振興、並びに、伝統文化の維持、新しい文化の創造へ取り組む、町民の意欲を高くむくイベントとして意義ある事業です。



郷土芸能 基永下之町の「ひょうたん踊り」(ふるさと祭り)



舞台発表（コールサンダンカの合唱）

舞台発表（日本舞踊）

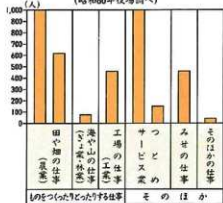


農林水産物の即売

第七章 南種子町の産業

— 豊かな自然の恵み —

南種子町の人びとの仕事
(昭和60年夜場調べ)



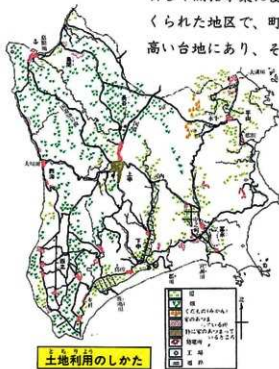
わたしたちの南種子町は、自然が豊かで、八つどの地区をみても、集落のある中心地を除いて、広々とした耕地や山林があり、緑がとても多い町です。

南種子町に住む人々の仕事のグラフをみると、南種子町で一番盛んな仕事は、農業であることがわかります。また、下の作付面積のグラフ（おもな作物のつくられた広さ）でわかるように、南種子町では、亜熱

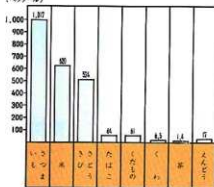
帯性気候に恵まれ、さつまいもやさとうきびを中心とする畑作農業が、大きな比重を占めています。

南種子町で、畑地の多い地区は、長谷、島間、西海、西之で、長谷を除くと、南種子町の西部にあたります。長谷は、中央北部にあたりますが、

新しく開拓事業によってつくられた地区で、町内でも高い台地にあり、そのほと



おもな作物のつくられた広さ(昭和62年夜場調べ)
(ヘクタール)



んどが畑地です。

南種子町の東部には、郡川などの河川の流域に開けた水田が多く、地区ではおもに平山、基永、下中です。ここは、町内はもとより、種子島でも、水田が最も多く、種子島の穀倉地帯といわれています。

土地利用の状況については、左の図（昭和62年調査）をみるとよくわかります。

(1) 農 業

ア さつまいも

南種子町の主要作物は、さつまいもとさとうきび、それに米ですが、作付面積の第1位は、さつまいもです。栽培面積は、年によって多少の変動はありますが、昭和62年は、1,017ha 平成2年は1,049ha とやや増えてきています。さつまいもは、収入を高めるためにはさとうきびに比べて今一つ魅力のたりない作物だといわれていますが、災害に強いとか、栽培にあまり手がかからない、収穫が多いなどという



さつまいも畑



さつまいもの収穫

利点をもっています。さつまいもを、南種子町の農家の人たちは、「カライモ」と呼んでいます。そのままゆでて食べる「カライモ」、米にまぜて炊き、練り合わせて食べる「カライモメシ」、自家製のでんぷんを作り、水で練って油で揚げ、煮しめに入れて食べる「カライモセン」など、素朴な島の味として親しまれてきました。また、このさつまいもは太平洋戦争以来、重要な食糧でしたが、やがて、食糧が充足してくると、早掘りの食用を除いて、でんぷん製造の方がさかんになってきました。町内にたくさんのでんぷん工場も建てられました。現在は、二つの工場にまどめられて、操業しています。

このため、栽培されるさつまいもの品種も、早掘りの食用のさつまいもとして導入したものを除けば、でんぷんの含有率が高く、しかも多収で病虫害に強い品種が大部分を占めるようになりました。

さつまいもの収穫は、10月中旬ごろからです。このころになると、さつまいも栽培農家もでんぷん工場もたいへん忙しくなります。あちこちの畑では、耕運機の音がひびき、袋詰めにしたさつまいもが、トラックで次々と工場に運び込まれます。工場では、この季節だけやどわれ



でんぷん工場

る人たちが、昼夜兼行で働いています。工場ですきたでんぶんは、大阪や名古屋方面に送り出され、水飴、お菓子、ビール、かまぼこ、薬品等の原料として使われます。

さつまいもは、この他にも、焼酎の原料として主要な農作物になっています。南種子町には、焼酎を造る醸造工場が一か所あります。ここで作り出される芋焼酎は「芳醇でありながら、スッキリとあまみまろやかな味わい」が親しまれて、南種子町の特産品の一つになっています。



さとうきび収穫

イ さとうきび

「黒潮寄する南風、受けて伸びゆくキビ畑」。

これは南種子町民歌の一節ですが、畑作農家の大部分がさとうきびを栽培しています。

南種子町における作付面積は、さつまいも、米について、三番目ですが、とれ高は第一位で、最も大きい収入源になっています。

種子島での砂糖製造の始まりは、1827年ですが、自家栽培製造が始まったのは、明治以降のことです。昭和30年代後半には、栽培も盛んになり、昭和37年には、南種子町にも大きな製糖工場が建てられました。それまでは、12月から3月にかけて、最も寒い時期に、キビを機械に噛ませ、絞った汁を煮つめて黒糖を造っていました。作業は砂糖小屋に交替で寝泊まりし徹夜で行われました。大変な労働でしたが、工場ができてからは、栽培と収穫だけに専念し、製糖は工場が引き受けることになったので、栽培面積も飛躍的に増えました。ところが、昭和44年以後、所得の倍増、農業の機械化と規模拡大の必要から、都会への出稼ぎが増えはじめ、さとうきびの栽培面積が減ってきました。そのため、せっかく建てた製糖工場も、昭和45年には、とうとう閉鎖されてしまいました。現在、町内のさとうきび栽培農家は、収穫したきびをトラックに積んで、となりの中種子町にある製糖工場まで運びこんでいます。



さとうきび畑

ウ その他（茶・たばこ・園芸）

本土では、八十八夜になると茶摘みが始まりますが、種子島では、3月に茶摘みをします。静岡茶など全然みないうちに、町内の製茶工場からは、芳しい香りの走り新茶が送り出されます。日本一早いお茶の生産です。



平山のポンカン畑

平成2年の南種子町における「主要作物のどれ高」をみると、さとうきび、米、さつまいもについて、葉たばこが4番目に挙げられています。平山地区、島間地区、西之地区などで、生産がさかんに行われています。

園芸では、ポンカン、タンカン、メロン、ソラマメ、カボチャなどの栽培に積極的に取り組み、農家所得の向上に努めています。なかでも、暖かい気候を利用して栽培されているポンカンやメロンは、他の地方より早い時期に作られ、収穫されたポンカンなどは、速く大阪や東京方面へも出荷されています。

エ 米

南種子町の東部、平山地区や基永地区、下中地区は、種子島で最も広い水田を持っています。これらの水田では、春3月から夏8月の初めまでが米作りの時期です。

これは、暖かい気候を利用した米の早づくりです。昭和16年から全町に普及した栽培法で、南種子町の米づくりで忘れてはならない大きな工夫のひとつです。上の表は、それ以前の栽培法（おそづくり）との比較ですが、みてわかるように、虫の害、ひでりの害、台風の害をすべて防ぐことができ、どれ高がうんと増えました。

一方、基永地区や下中地区、西之地区の本村では、耕地整理が進み、農道がりっぱに整備され、用水路や溜池もきちんと作られ農作業が大変しやすくなりました。

いねの早づくりとおそづくりのちがい

しごと	つくり方	おそづくり	早づくり
田植え		6月～7月	4月
いねかり		10月～11月	7月～8月
虫のがい		五分の一も台ほになった	ほとんどなくなった
ひでりのがい		よくうけた	ほとんどなくなった
台風のがい		花のさくじきに台風がきてひでりがいもうけた	かりどつたあと台風がくるのですくなかった



コンバインによる「米の収穫」



馬耕記念碑(基永研修センター前)

基永地区に建立されている「耕地整理記念碑」が、当時の大事業を今に伝えています。また、同じ基永地区には「馬耕記念碑」も建てられています。この碑をみると、南種子町の水田耕作の移り変わりがよくわかります。南種子町では、明治19年に馬耕が始まりました。それまでの「ホイットウ」にくらべて、深く耕やされ、仕事も早くすむということで、基永を中心に広まっていったのです。この

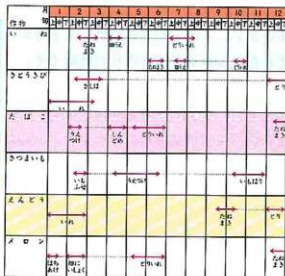


記念碑は、馬耕によって米の収穫が著しく向上したので、このことを後世に伝えようと、馬耕法はじまりの地基永に建てられたということです。

水田耕作の機械化は、昭和30年代の耕運機の導入に始まり、昭和40年代には、バインダー、田植え機、動力噴霧機、揚水機等が使われるようになりました。さらに進んで、昭和50年代には、トラクター、同年後半になってからは、稲の収穫にコンバインや小型の穀乾燥機が一部の稲作農家に導入されました。

このように、機械化は年を追うごとに進み、農家の人たちは、上の表「10aの田を耕す時間」をみてもわかるように、これまでの田植えから、とり入れまでのほう大な手作業が激減し、仕事が早く、しかも楽にできるようになりました。また、暖かい気候なので、農作業のうち除草についてやす労力は多く、夏の農作物では少なくとも、3回の除草が必要とされています。ところが、除草剤の普及と動力噴霧機など機械の導入で、田んぼに這うようにして除草する人や田車をつく人の姿、もう見られなくなりました。

南種子町の農家の作物ごとの作業スケジュール



それに、化学肥料や農薬の普及も、作物の増産や質の向上に効果を上げています。

(2) 畜産

南種子町は、古くから馬産がとて盛んでした。藩制時代には、島間、上中、西之の三か所に直轄の牧場があったほどです。この牧場は、明治になってから廃止されました。そのかわりに、明治6年、牛馬が農業をするのに是非必要だということで、長谷の摺久保、長谷野、島間の小平山、上方、田尾、西海の大川、牛野、上中、荃永の上里などの集落に共同の放牧場が設けられ、牛馬は全体で300頭以上いたということです。この放牧場も明治27年に閉鎖されましたが、そのあとには今も「牧の神」と呼んで残っています。

馬は、荷馬車のほか、農耕用としてほとんどの農家で飼われていましたが、自動車の発達普及や耕運機などの普及によって、昭和35年以降、馬の飼育は減ってきました。

豚の飼育は、昭和52年の2,836頭を最盛期として以後減少し、現在約60頭（平成2年）になってしまいました。



牛の放牧

酪農について、南種子町はあまり振いませんでしたが、昭和50年代に入ってから、一般家庭や学校給食の需要、交通機関の発達による島外への移住などによって、乳用牛に対する関心が高まり、飼育の頭数も年々増加してきました。現在、平成2年で450頭に達しています。

肉用牛は、昭和35年頃までは、67頭でほとんど一頭飼いという貧弱なものでした。ところが、昭和40年代に入ってから、牛肉の需要が年毎に増し、また肉価も上昇してきたので肉用牛を飼育する農家が増えてきました。さらに平成2年には乳用牛の2倍以上の965頭まで増加し、生産額も南種子町の畜産では、第1位を占めるほど盛んになってきました。

(3) 林業

南種子町の山林は、海岸の低いところから、高い上中地区から長谷地区の方へせりあがっていく土地にあります。ここで育てられている樹種の多くは、マツやスギです。山林の面積は、南種子町の総面積の半分以上を占めています。この山林のうち



手入れされたスギ林

人工林の約四分の一は、屋久スギですが、近年になって島間スギが増えてきています。島間スギは屋久杉より成長はやや遅いですが、谷間から頂上まで乾燥地でもよく育ち、枝が小さくて枝落ちが早期に自然に行われる等省力化になったり、半黒の芯材、整然とした木目などの長所を備えています。昭和44年に県が南種子町に採穂園を設けて増殖を図ってから増えてきたので

です。天然林では、広葉樹が多く、パルプ材として収穫されています。郡川や鹿鳴川、宮瀬川などの上流域にある山林は、下流の水田地帯の水源確保の役割も果たしています。また、下中地区や基永地区、西之地区の本村集落の海岸にある浜山は、防風林や防潮林、沿岸の魚寄林として大切な働きをしています。

天然林の伐採や人工林の造成も盛んに行われていますが、近ごろでは、チェーンソーや動力刈払機、集材機やクレーン車、ケーブル等の機械の利用と、林道の整備で、仕事がたいへん楽になってきました。

20年ほど前までは、南種子町山林には、いたるところに大きな松の木が生えていましたが、松食虫のため枯れてしまい、今ではだいぶ少なくなりました。この被害をくい止めるため、ヘリコプターによる松食虫防除の空中薬剤散布も行われています。

南種子町でも、山の持主たちで作っている森林組合があります。森林組合では、苗木の世話をしています。ここで育てたスギ苗、イヌマキ、山モモなどは植林や防風



なえ木畑（森林組合）

林、庭木や生垣用として販売しています。

その他、植林や下払い、木の切り出しなどもしています。また、町内の建築用材は、町内で自給することを目標に、昭和58年に、長谷地区の赤石に製材工場を建設しました。そして、町内林の活用、特にスギ山の除間伐を推進し、木材の生産に努めています。

樹木の外に、ナエタケやメタケが繁茂し、川岸には、テンチクが多く分布して護岸に役立っています。これらの竹は、竹の子を食用にするほか、建築用、筆軸用として島外へ移出されていましたが、最近ではえんどう豆などの栽培のため、遠く北海道に送り出されているということです。

南種子町は、太陽とみどりの町として、美しい景色や豊かな自然に恵まれています。なかでも、最近では森林の持つ公益性への期待が増大しています。それにこたえて、すぐれた自然環境の保全や森林レクリエーション等、町の人たちの心のやすらぎやくらしの豊かさを求めるために、森林資源の保護に力を入れています。

(4) 水産業

南種子町は、三方を海に囲まれています。周りの海は黒潮の影響を受けて、イセエビやアサヒガニ、ナガラメやトビウオなどの資源に恵まれた好漁場となっています。

港は、島間、大川、砂坂、下西目、竹崎、広田、浜田などにあり、小型の漁船をつかって、漁業を営んでいます。昭和63年の調査では、漁業専業が約30戸、兼業が約180戸で、漁船が、160隻ぐらいになっています。漁船は、5トン未満の小型漁船が大部分です。



漁港のようす (竹崎)

昔は、船が小さいうえ、設備も整っていないだったので、海岸の近くで漁でしたが、近ごろでは、動力船に、無線通信機やトランシーバーなどの近代的装備と、改



製材工場のようす

良された新しい漁具を利用して、沿岸から沖合の漁場まで出漁しています。

海でとれた魚や貝類は、南種子漁協のある島間の魚市場で、セリにかけられ、町内やとなりの中種子町、西之表市の魚屋に引き取られて売りさばかれています。売り先は、ほとんどが島内です。

種子島の名産として知られている「ナガラメ」や「イセエビ」は、島外へ、遠くは大阪方面まで高い値段で売られています。その外、アサヒガニや水イカなども南種子町の新鮮な特産品として島外へ送り出されています。



南漁協でのせり風景

内水面漁業では、南種子町の自然条件において、冬期シラスウナギが水揚げされ、かなりの収益をあげています。

また、昭和60年から「オニテナガエビ」の養殖事業を導入しています。



トコブシ (ナガラメ)



アサヒガニ (カブトガニ)

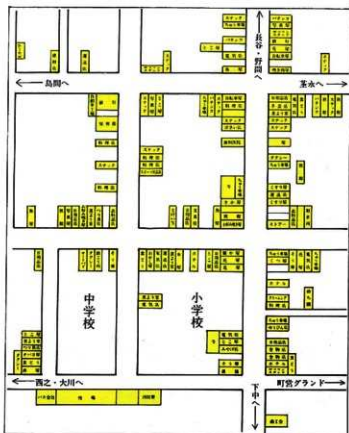


イセエビ

近代的な設備を整えた養殖池で、稚エビを養殖し、数か月かけて育て上げます。平成元年からは、本格的な養殖栽培が行なわれ、南種子町の特産品の一つとして、さかんに出荷されています。

漁をする人たちは、漁業を盛んにするために、南種子町漁業協同組合を作っています。組合では、事務所を島間に設置して、魚の売り方や港の設備について話し合ったり、漁船や漁網の購入資金の世話をしたりしています。また、特産品のナガラメやイセエビ、アサヒガニなどを増やすための漁期を決めたり、人工魚礁などを作ったりして、漁業を盛んにするための仕事に努めています。

(5) 商業



となりの中種子町から、国道58号線を南下して南種子町に入ると、長谷地区を通り過ぎて、上中地区の入口大字都集落到着きます。

すぐ左手に五階建ての大きなホテルが建っています。

やがて、商店街に入ると、町役場のあるあたりまで約1kmにわたって商店が続きます。なかでも、にぎやかどころが、上中本町通りです。左の地図を見てわかるように、道路の両側にずらりと店が並んでいます。ここは、上中地区の中心地でもあり、スーパーマーケットや専門店が数多くあり、地元の人だけで

なく、町内の各地から、バスや自家用車を利用して買い物にきます。

商店のほかに、ホテルや旅館、飲食店などもあります。商店の品物は、町内や島内はもちろんのこと、鹿児島市をはじめ遠くは北海道から仕入れるものもあるそうです。洋服や着物などは、大阪や京都などから仕入れるそうです。

店の人たちは、商工会を作っています。

商工会では、お互いに協力しあって店が繁昌するように、いろいろ



商店のようす

ろな工夫をしています。

8月・商工会を中心にして、ロケット祭が催れ、大ぜいの人で、商店街はにぎわい



商工会館

ます。日中は、みこしが威勢よく町へくり出し、ロケット太鼓が夏空にとどろき渡ります。夜は、歩行者天国に夜店が並び、おそくまで人の波がつづきます。

その他、大売り出しをしたり、夜でも店の名前がわかるように明るい街灯をとりつけたりしています。

また、観光案内の看板をたてたり、ロケットマラソンなどの行事

を行なったりしています。

スーパーマーケットでは、イベントに合った売場を設けたり、店外で「青空市」を開いたりして、客のサービスに努めています。

上中地区を除く他の地区では、どの地区にも学校の近くに店がありますが、島間地区では、港の近くに店が集まり、長谷地区では、ほぼ中央の道路が交差する十文字に店が集まっています。店は、ほとんど雑貨店です。また、タバコや飲み物などの自動販売機も、数多く設置されています。



ロケット祭り(山車)

(6) 工業

南種子町では、昭和59年に有尾工業団地を設定し、企業誘致に取り組みました。その結果、ロケット関連の日本液体水素株式会社が進出し、昭和62年に南種子工場が完成しました。昭和62年から、宇宙センターから打ち上げるロケットの燃料作りを主に操業を開始しています。約3haの敷地に、原料から製品の燃料を作りだすた

めの必要な機械や建物が順序よく並んでいます。また、作業を早く、正しく行なうために、コンピューターが使用されています。その他近代的な施設・設備を整えた町内で一番大きな工場です。

その外、畑でとれたものを加工する工場があります。



日本液体水素南種子工場

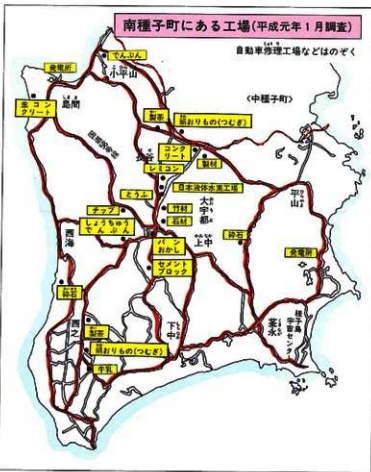
作付面積が町内で一番広いさつまいもからでんぶんをとり出す「でんぶん工場」が、二つあります。毎年さつまいもの収穫される10月ごろから操業を始め、製品のでんぶんは、大阪や名古屋方面へ送り出されています。従業員は、町内の農家の人

たちが多く季節労働者として雇用されています。

また、さつまいもを原料にして作る「焼酎工場」もあります。

その他、日本一、出足の早い走り新茶を島外の市場に送り出す「製茶工場」もあります。これらの工場は、どれも地域との結びつきの深い工場であることがわかります。

また、採石、ブロック、レミコン、製材所、木工場など、建設に関係のある工場や、たたみ、車の修理や整備をする工場もありますが、いずれも小規模で、従



業員も少ない工場がほとんどです。

昭和4年に西之地区の田代に、鹿鳴川の水を利用した水力発電所ができたのが、南種子町で電気を起こした最初です。次は、島間川を利用して、昭和6年に島間発電所、つづいて、昭和21年に、大川発電所ができ、南種子町全域に夜間点灯が始まりました。昼夜24時間の送電開始は、昭和30年代後半からです。その後昭和41年に、九州電力株式会社に移管され、西之表の火力発電所から送電されていました。需要が伸びてきたので、昭和56年に、南種子町の島間地区、島間港の近くに、九州電力新種子島発電所ができ、送電を始めて今日に至っています。

南種子町にある工場の数			
しゅるい	数	しゅるい	数
自動車せいび工場 (自動車・鉄骨きよくじ)	1	どうふ工場	2
せい茶工場	3	さい石工場	2
タタミ工場	3	てんぶん工場	2
木工場	2	液体水素工場	1
まコンクリート工場	3	しょうちゆう工場	1
製材所	3	石材工場	1

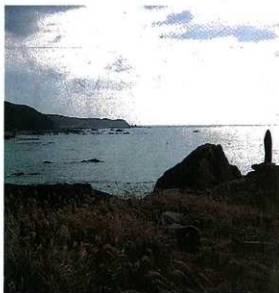
(平成2年調べ)

(7) 交通

ア 陸上交通

南種子町の古い道に、「ナキの坂」(泣きの坂)、「セザリの坂」(腹這いの坂)などと、いかに急な坂道が多かったかを表す地名が残っています。古い道はそればかりではなく、海岸沿いでは断崖絶壁で道がないところや川に橋がかかっていないところなどもある。交通がたいへん不便でした。こんな不便を少しでもなくしようと、まだ機械のない時代に、独力で、しかも人力で知恵で、難事業に取り組み見事に完成させた人たちがいました。その一人は西之地区の砂坂から西海地区の立石の間の難所に、7年の歳月をかけ血のにじむような苦難の末、見事に生活道を開通させた砂坂孫左衛門、もう一人は、平山地区から中種子町の熊野へ通ずる道路をさえぎるように橋のない大浦川が流れているところに木橋を完成させた坂口吉助です。

この二人の美挙は、顕彰碑の建立とともに、後世に語りつがれています。現在のような広い舗装道路、りっぱなコンク



砂坂孫左衛門の顕彰碑(西之砂坂)



坂口吉助翁顕彰碑 (平山)

リート橋を車で行き来している私たちには、想像もつかない明治のころの話です。

南種子町の道路が、今のように整備されたのは、大正4年に島間～上中線、大正13年に上中～基永線がそれぞれ県道に編入されたからです。昭和20年代からさらに改修され、上中～大川線、下中～基永線、島間～西之線など、新しい道路もできて、昭和40年代の後半には、西之表～野間～上中～島間港の道路が、国道に編入されて、国道58号線となりました。これは、種子島宇宙センターが設置されたことにもよ

るものです。

これまで、道はばがせまいうえに、カーブが多く、そのうえ雨が降るとぬかるみになって車も人も通行に苦勞した道が、広くなり舗装されて快適に通行できるようになりました。

現在、南種子町の道路の舗装率は、およそ96%となっています。

昔の南種子町の交通機関の中心は馬でした。今は、車で上中から西之表まで、約2時間で往復できます。しかし、昔は、馬に米を2俵積んで、夜中の2時ごろ上中を出発すると野間で夜が明け、昼ごろ西之表につきました。それから、昼食をすまして上中に帰り着いたのは、夜中のことだったそうで、まる1日かかっていたのでした。

今から80年余り前、上中の人々が島間～上中の間の荷物の運搬を、荷馬車で始めました。その後、各地区に2台、3台と増えて、島間港との間の荷物を運んでいました。昭和12年には、荷馬車の数が上中だけでも28台あったそうです。

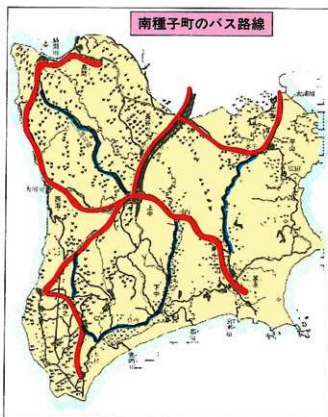
そのうち、馬車引き業だけでなく、自家用としても、農作物や肥料、燃料などの



荷馬車による運送

運搬、ときには、結婚式の花嫁さんが乗る車として広く利用されました。

この荷馬車は、はじめは二輪で木の輪の外側に鉄の輪をはめたものを車輪として



使っていましたが、その後、前頁の写真のような四輪でゴム製のタイヤに変わってきました。しかし、今では、このような馬車を見ることはたいへん少なくなりました。

馬車にかわって自動車が南種子町を走ったのは、大正12年で、初めはハイヤーでした。

南種子町で、バスが走ったのは昭和10年です。そのときは、西之表へ上中間でした。その後、道路がよくなるにつれて、各地区にもバスが走るようになりました。バスは、種子島交通株式会社だけが運行しています。

今から20年前までは、町内にもバスの路線が多く便利でしたが、その後町の人口が減ったり自家用車や単車が増えたりして、バスを利用する客が少なくなりました。そのため、バスの走る回数を減らしたり、路線を廃止したりしました。上の地図で、みどりの路線が、今はバスが走っていない廃止路線です。

イ 海上交通

島間港は、古くから米や産物の輸送港として重要な港でした。現在も、南種子町の海の玄関口として、また、宇宙センターに近い港として発展している港です。汽船は、以前は大型貨客船が、鹿児島と種子島、屋久島を結んで就航していましたが、現在は、屋久島との間に第二太陽丸が毎日1往復就航しています。



種子・屋久航路(島間新港)

(B) 観 光



南種子町を代表する景勝地・門倉岬

南種子町は、種子島の中でも、特に自然景勝をもつ観光地です。また、日本唯一の実用衛星打ち上げ基地・鉄砲伝来の地として有名な門倉岬をはじめ、宝満の池・千座の岩屋など名所地がたくさんあります。



南種子町の観光的特性を挙げてみると、

- 第1に、温暖な気候に恵まれて、亜熱帯の動植物がたくさん見られるということです。
- 第2に、上の写真の鉄砲伝来の地門倉岬や、広田の遺跡など、南島や中国大陸との交流を示す史跡に恵まれていること、願成就（秋祭り）に奉納される郷土

芸能などや宝満神社の赤米お田植祭りなどの農耕儀礼が古くから受け継がれ、現在も、生活の中に息づいているということです。

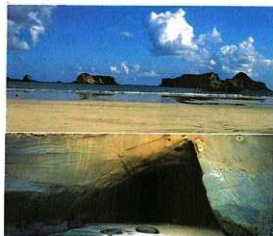
- 第3に、科学技術の先端をいくロケット基地として、種子島宇宙センターが設けられており、宇宙がぐんと身近になったということで、種子島観光の拠点のひとつになっているということです。太陽とみどりと青い海、“おじゃい申せ”南種子へ!!

鉄砲伝来「火縄の里」から、宇宙に一番近い「ロケットの町」南種子町を訪れる観光客は、昭和58年度67,000人で、大きく伸びています。



火縄銃試射

ここで、南種子町の主要な観光資源をいくつか挙げてみましょう。



⑦ 千座の岩屋と浜田海水浴場

長い年月の間に海水の働きでえぐられた海食洞で広さが千座くらいあるというので名づけられた千座の岩屋と、浜田海岸、こ

① 大浦塩田跡とメヒルギの自生地

昔塩田のあった所です。ここには熱帯植物のメヒルギが群生しています。メヒルギは、胎生植物として珍しい植物です。



⑧ 広田遺跡

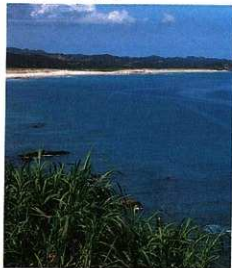
これは遠浅の海水浴場で毎年10000人以上の海水浴客でにぎわっています。

弥生時代前期～後期にかけての埋葬

遺跡です。日本最古の文字といわれる⑨と刻まれた貝符が出土して有名になりました。

⑨ 門倉・前ノ浜自然公園

1543年ポルトガル船が漂着した鉄砲伝来の地。展望台から白砂青松の前之浜が一望できる島内随一の景勝の地です。



⑩ ドラム・エルタン号漂着記念碑とインギー鳥

1894年英国船ドラム・エルタン号が漂着した時

乗組員を救助したお礼にもらいうけた鶏をインギー鳥（イギリスのにわとり）と呼んで、

今も大切に飼育しています。



㊦種子島宇宙センター

昭和41年に、宇宙開発事業団が建設したロケット発射場です。昭和43年に初のロ



宇宙センター敷地内の芝生の広場

ケット打ち上げ以来開発が進められ、昭和61年には、初のH-1型

ロケットの打ち上げに成功し、現在H-II型ロケットの打ち上げに向けて、すでに射場も完成しました。現在、地上燃焼試験が行なわれるなど、その開発が着々と進められています。

宇宙センターの入口にあるのが、右の写真の宇宙開発展示館です。宇宙センターの活



宇宙開発展示館のようす

動のようすや人工衛星の利用等について実物、模型、映像等を使ってわかりやすく紹介してくれます。年間7～8万人の見学者がここを訪れています。



H-1型ロケット打ち上げ

㊧宇宙ヶ丘公園と郷土館



南種子町郷土館は、公園内にあります。町内の自然・歴史・民俗について豊富な資料が展示されています。

上中の市街地から2kmほど南にある町内最大の公園です。ロケット打ち上げの見学に最適の場所です。東に宇宙センター、西に屋久島の高峰が望め雄大な景色をながめることのできる島内有数の景勝地でもあります。



(9) 南種子町の特産品と味



海の幸

南種子町の沿岸一帯は、魚介類に恵まれています。北流する黒潮に洗われて水揚げされる、イセエビ、ナガラメ、アサヒガニ、トビウオなど、潮の香りと新鮮な味がそのまま食卓に運ばれます。

真赤にゆでたイセエビを一匹のまま両手で持ってバリバリ食べる豪華な味、刺身やフライもまた最高の味です。ナガラメの味噌煮、キビナゴやイカの刺身、トビウオの塩干し、どれをとっても南種子町ならではの珍味であり、美味です。

山の幸

海岸に自生するハマゼリの酢味噌あえ、つとせりの香が生きている海辺の山菜です。

西海岸の道路沿いに群生するアザミの茎や

町内の野山のいたるところに自生するツワ、ニガタケやテンチクの竹の子など、山菜の煮しめは、家毎に微妙に味の違いがでて、温かい人情が育ててきたおふくろの味です。

祭りや祝いごとの席に出るツノマキやカカラマンジュウなど、素朴な伝統に支えられた独特の味は、手のひらの温もりを感じさせるたまらなくなつかしいふるさとの味です。

このように南種子町を代表する味は、旬の味です。

その他、黒砂糖、芋焼酎、ポンカン、タンカン、など、豊かな特産品に恵まれて、四季を通じて訪れる人達に喜ばれています。

また、南種子町では、パッションジュースなど、特産品づくりを進めるため、「特産品開発センター」を建設して、新しい特産品の開発にも力を注いでいます。



第八章 南種子町の宇宙にかける子どもの夢



H-IIロケット打ち上げ想像図

“乗りませんか。
南種子発、宇宙行き”



発射台に搬入付け付けられたH-IIロケット。
平成6年2月打ち上げを予定しています。

ごう音を響かせ、噴き出したオレンジ色の炎を引きながら、純白のH-II型ロケットが、南国の空をはるか赤道上空36000kmの静止軌道目ざして上昇していきます。先端に積み込まれた実用衛星は、もう私たちの生活とは、切り離せないほど身近なものになりました。こうした実用衛星を数多く宇宙へ送り出したところがわたしたちの町にある種子島宇宙センターです。昭和43年に、竹崎射場から気象衛星用小型ロケットが打ち上げられ、これによって宇宙へのとびらが開かれたのです。

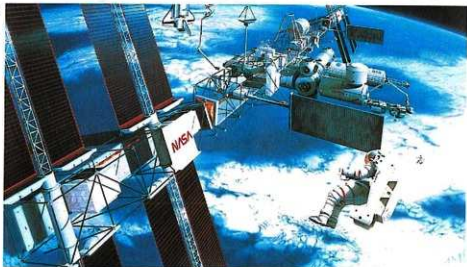
この記念すべき第1号ロケットを打ち上げたランチャーは、現在、近くの基南小学校の校庭に大切に展示されています。国際宇宙年記念作文コンクールに入賞した「宇宙病院設立」というすばらしい作文を書いた基南中学校の山下千草さんも、このランチャーの展示されている里での生活の中から、宇宙への夢を育ててきたのでしょう。

昭和49年には、大崎射場が完成、搭載する衛星も大型化し、昭和61年には自主技術を中心に開発したH-II型ロケットを打ち上げました。現在、次世代の主カローケ

ットH-II型の開発が着々と進められています。すでに大崎射場に隣接して吉信射場も完成し、ここから、大型ロケットH-II型が飛び立つ予定です。

前頁の想像図は、H-II型ロケットを利用した「ホープ計画」ですが、宇宙ステーションへの往還機ホープが、この南種子町から飛びたつ雄姿を近い将来見ることができるとも知れません。

宇宙センターの入口に宇宙開発展示館があります。館内に一步入ると、もうそこは、小さな宇宙です。「宇宙と人類の未来」「わが国のロケットと人工衛星」などのテーマに分かれて、わかりやすい展示がしてあります。そのテーマの中の「月、そして惑星へ」のところには、月世界のコロニーの模型があって、小さな科学者たちが未来への夢に瞳を輝かせて見入っていました。きっと、山下さんと同じ作文コンクール入賞の「ウサギ印の宇宙スイカ」という見事な作文を書いた西野小学校の戸石美香さんと同じ思いで、未来への限りない楽しい夢を描いて



ホープ計画

いたのかも知れません。上の絵は、いつの日か南種子発宇宙行きの「ホープ」が目指す宇宙ステーションの想像図です。

このように、21世紀の宇宙時代に向けて、宇宙開発の飛躍的な進展が図られようとしているとき、私たちの南種子町は、宇宙時代の拠点地としてこれから先も、大きく発展していくことでしょう。

作文で見る山下千草さんの夢や戸石美香さんの願いは、そのまま南種子町に住うわたしたちの夢であり、さらに住みよい町づくりを目ざす願いでもあります。その実現もそう速くないような気がします。

編 集 後 記

「ふるさとの散歩路」 編集委員長 河野 了

南種子町の歴史と現状を分かりやすく記述し、小・中学生から高齢者にいたる各年代層において、生涯学習などで広く活用し、併せて外来者が手にして南種子町を理解できる、ふるさと史をつくりたいので協力してほしいと、柳田町長に言われたのは、平成3年11月ごろでした。

一口に「ふるさと」といっても、その内容は人によりちがうところがあり、どの範囲で記述するかということは充分打ち合わせることで、町長の要請を一応引き受けた次第でした。何回か打ち合わせの結果、小菌さんに提示してもらったことを主に書くことにしました。

第一章「南種子町へのいざない」、第二章「心のふるさとをたずねて」、第七章



編集委員

「南種子町の産業」、第八章「宇宙にかける子供の夢」を小菌幸生さんに、第三章「南種子の歴史」、第四章「南種子町の宝物」、第五章「南種子の人物伝」、第六章「南種子の民俗芸能」

を岩坪香さんに担当・執筆していただき、鉄砲伝来とロケット、自然とうるおいに満ちたふるさとの姿を浮かび上がらせることができました。

平成4年11月9日の編集委員会最終打ち合わせ会で、原稿内容の確定、ページ組み、写真割付、発刊までの日程等を詰め、この線に添った予定とおりの発刊ができました。ただ残念に思うのは、諸事情により文字をひと回り大きくできなかったことです。

最後に、表紙の絵を^{大が}画いていただきました。鹿児島市立美術館学芸係長元史郎先生、広田遺跡関係の写真を提供して下さった盛園尚孝先生、ロケット打ち上げ等写真を提供下さいました宇宙開発事業団に厚くお礼申し上げます。

紙面の制限で書きえなかったことがたくさんあるようです。あの豊かな表現力をもつ南種子のことは、各集落ごとに多少変化する年中行事、数千にのぼる草切節の

歌詞、南種子町民の人間形式にもっとも大きな力を及ぼしたことわざ、年中行事、人生儀礼等どれもこれもふるさと南種子を知る大事な要素だと思います。先人の残した大事なものが消える日が遠くないような気がします。どれひとつをとっても膨大なものです。篤志の方がこれの保存に努められることを期待します。

みなみたねの散歩路

編纂委員	河野	了
〃	小菌	幸生
〃	岩坪	香
〃	川田	孝雄
〃	崎田	宏

参考文献

1. 「南種子町郷土誌」歴史編、行政編、民俗編
2. 「種子島法華小史」岩下求徳
3. 「種子島の人々」柳田桃太郎
4. 「鹿児島県の民俗芸能」県教委（平成2、3年度）
5. 「基永郷土誌」基永公民館
6. 「長谷開拓の歩み」長谷高齢者学級
7. 「西海」大川小学校百周年記念事業実行委員会
8. 「種子島家譜」
9. 「日本史」山本武夫
10. 「多嶺国府・国分寺」下野敏見
11. 種子島歌の流れ
「大踊り・小踊・民謡集」石堂静也
12. 「薩摩秘史」家坂洋子
13. 「日本書記」多称の桑
14. 「定本、柳田国男集」
「わたしたちの南種子町」（小学校
社会科副読本）

写真提供

宇宙開発事業団

盛園尚孝氏（鹿児島市）

表紙題字・挿絵

立元史郎氏（鹿児島市）

みなみたねの散歩路

平成5年3月発行

編集 みなみたねの散歩路編纂委員会

発行 南種子町

印刷 鹿児島市南栄3-1

文進社印刷㈱



